

白兎が怪人になるのは
間違っているだろうか

白米は正義

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もし、ベル・クラネルが閻イウイルス派閥に捕まって人体実験の末に怪人になってしまう話。

怪人を増やそうと考えた閻派閥が人体実験をしていた感じです。

タグは追加する可能性があります。

謝罪

ウダイオスの黒剣の使い道について14話投稿前の時点では双剣が大剣よりも多くの票を得ていたため双剣と決定していたのですが、自分がアンケートの投票終了の設定を怠ったために今回のような事態になってしまいました。

読者の皆様を混乱させるようなことをしてしまい、誠に申し訳ありませんでした。
今回の様な事が二度と起こらないようにしたいと思います。

謝罪 2

以前、オリ団員等のことでアンケートをしたのですが今回の話で新たに生み出された
怪人達の扱いについてアンケートの結果では出さないという事になっていたのですが、
それでは闇派閥側が少し劣勢な気がしてしまい登場させました。

読者の皆様を混乱させる様な内容変更してしまい誠に申し訳ありませんでした。
二度と大きな内容変更がないようにしたいと思います。

目次

プロローグ | 1

覚悟 | 9

動き出す闇 | 12

出会い | 19

〔ハスティア・ファミリア〕 | 23

冒険者登録 | 30

ダンジョン | 36

深層 | 46

詭弁 | 52

強制任務（ミッション） | 58

邂逅 | 61

階層主討伐 | 65

遠征終了 | 71

震撼 | 77

暗躍 | 80

悪夢の再来 | 84

死闘 | 89

新たな頂天の誕生 | 94

騒動 | 106

暗転 | 112

悲しき邂逅 | 115

白兔の怒号 | 122

独白 | 129

一先ずの幕切れ | 132

もう一つの眷属の物語 | 138

慟哭	191
悪意の牙	184
神会（デナトウス）	178
魔剣嫌いの鍛冶師（ヴェルフ・クロツゾ）	173
前触れ	169
増幅する悪意	163
終幕	146

プロローグ

僕、ベル・クラネルはオラリオに着いたその日の夜にどこかにへと連れ込まれた。

手足を縛られ、目隠しに猿轡をつけられたまま放置されていたが、どこからか悲鳴のような叫び声が聞こえて来る。

怖くて震えながら聞きたくもない悲鳴を二十回近く聞いた所で、僕の身体は誰かに抱えられて宙に浮いた。

「デメエで今日の実験が最後か……。まあ、失敗するだろうがな……。」

僕を抱えている男がそんな言葉を漏らした。

実験・失敗その言葉を聞いて僕は血の気が引いた。

人体実験の材料として僕は使われる、そして確実な死を迎えるという事がハッキリと理解出来た。

「んっ……………!!?」

「おいおい、今更暴れたつてもう手遅れなんだよクソガキ。」

暴れる僕を男はさほど気にした様子も無く歩き続ける。

そうして、やって来た場所は血塗れの部屋だった。

その部屋の中に不気味な仮面をつけた男がいて、僕を抱えている男と話をしている。『これで最後か。』

「ああ、そうだ。」

その会話の後、僕は台座の様な物に乗せられて全身をさらに拘束されてしまう。

「それでこのガキには何の魔石を喰わせるんだ？」

『そうだな、この強化種ミノタウロスの魔石を使うとしよう。』

「こんなガキに強化種の魔石を使うのか？ 勿体無さ過ぎるだろ。」

魔石？ 使う？ 何を言っているんだ、この人達は？

そんな事を思っていると、胸に鋭い痛みが走ったかと思ったらナイフで斬られていた。

その切り口に拳大の極彩色の魔石を押し込まれた。

その瞬間、とてつもない激痛と共に頭の中や身体の中を掻き混ぜられているような感覚が押し寄せて来る。

「ぐうあああああああああああああああああつ!?!」

その押し寄せて来る得体の知れない気持ち悪さに僕は声を抑える事が出来ずに叫ぶ。「うるせえな、俺は戻ってるぞ。」

『ああ、好きにしろ。』

そうやって男の一人はどこかにへと行き、仮面の男が僕の猿轡を外して紫紺色の魔石を口に押し込まれた。

その瞬間、さつきから僕の中を掻き回している気持ち悪さが更に倍増した気がする。

「ぐおおあああああああああああああああつ!？」

そんな中で僕はこう思った、死ぬと。

お爺ちゃんに英雄譚を聞かせて貰って英雄に憧れていた僕は事故でお爺ちゃんを亡くした後、一念発起でこの迷宮都市オラリオに来たけど、どこの派閥にも入る事が出来なかった。

そして、非道な人体実験の犠牲者の一人として死ぬんだ……。

そう諦めかけていたその時、僕はもう一つの感情が沸き上がって来る。

それは、憤怒だ。

僕はこんな目に遭っている自分に対して憤怒を抱いていた。

しかし、それと同等にこんな人を人と思わない人体実験コトをしている男達にも激しい憤怒を抱いている。

すると、そんな時身体に変化が訪れた。

今まで僕自身の中で渦巻いていた気持ち悪さが綺麗サツパリ消えていた。

更に言ってしまうえば、今までに類を見ない位に身体に力が漲っている事を感じるほどだ。

『これは・・・成功だ!!』

一人だけ残った仮面の男が僕の変化を感じ取り、歓喜の声を上げる。

『まさか、最後の最後でこれほどの作品が出来上がるとはな・・・!!』

そう言っている仮面の男は興奮冷めやらぬといった感じだ。

僕はそんな光景を見た後、身体に力を入れて拘束具を破壊する。

『なっ、何?!』

幾重にも重ねられた拘束具をいとも簡単に破壊してみせた僕に対して驚愕の声を上げる。

「遅い」

僕は怒りのままに仮面の男の顔面に拳を叩き込んだ。

すると、男の頭はまるで熟れ過ぎた果物の様に潰れてその血が僕の顔に掛かる。

「汚いな・・・」

そう言いながら僕は顔に掛かった血を噴く袖で拭うと、得物になる武器を探すけれど見つからず素手のままで行動するしかなかった。

「確か、僕をここまで連れて来た男が残っていたな・・・。そいつから武器を奪えばいい

か。」

そう言つて僕が部屋を出て少し先に進むと、一つの部屋を発見して中を確認すると、そこには様々な種族がこと切れた状態で放置されていた。

「っ!!」

その光景を目にした僕は拳から血が流れだすまで力一杯握る。

こんな事が起こつていて良い訳が無い、こんな惨状は僕の番で終わりにするんだ!!
 そう決意した僕がその部屋を出ると、外では男とその仲間が待ち構えていた。

「よお、お前死なずに怪人クリーチャーになつたんだなあ・・・。」

「怪人?」

男の口から聞きなれない言葉が出てきた。

すると、男は馬鹿正直にこう言つて来る。

「ああ、お前はもうヒューマン普通じゃなくモンスターと混化け物じつた怪人なんだよおっ!!」

指差しながらそう言つて来る男に対して僕はこう言った。

「そうか、もうヒューマンじゃないんだ。」

男に突きつけられた事実を聞いてもポツリと眩きながら僕に動揺は無かった。

だって、モンスターの魔石を埋め込まれて普通にいられるわけがないからだ。

「まあ、お前もコイツで俺の操り人形にしてやるよ。」

そう言いながら男は一本の短剣を取り出した。

「コイツはある呪術師ヘクサーに作らせた短剣で、傷を負わせた者を操る事が出来るって代物だ。ここにいる奴はお前と同じように適応した怪人だが理性がぶつ飛んじまつてるからコイツで操ってるって訳だ。」

自慢気にそう語って来る男に対して僕は行動で応える事にした。

ぐちゃりっ。

「は?」

男の左胸、つまり心臓のある場所が僕の右腕によつて貫かれていた。

「なあ・・・っ!」

信じられないといった表情を浮かべる男に対して僕はこう言った。

「相手が一人だからって油断が過ぎますよ。」

そう言いながら僕は腕を抜き取って付着している血を払い落とすと、周囲の空気が変わったことに気づく。

原因は僕の事を取り囲んでいる失敗作と呼ばれている怪人クリーチャーもどき達の事だ。

支配下に置いていた男が死んで支配から解放されたといった感じか。

そして、目の前に居る僕に牙を剥こうとしている。

その状況を理解した僕は拳を握り、こう言った。

「来い。」

『ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!』

僕の言葉を皮切りに怪クリーチャー人もどき達は一斉に襲い掛かってくるが、実際は自分以外は敵といった大乱戦だった。

僕は襲い掛かって来る怪クリーチャー人もどき達の顎、腕、肩、膝、足を躊躇する事無く砕いて行動不能にしている。

そうして、全ての怪クリーチャー人もどき達の動きを止めてから完全に息の根を止める為に頭を踏み砕こうとした瞬間、一体の怪クリーチャー人もどきが話しかけてくる。

「感謝スル、名モ知ラヌヒューマンヨ。」

「(死の間際になって理性を取り戻したのか……。) 感謝される事はしていません、これから貴方達を殺そうとしている僕に感謝する事は無いですよ。」

素っ気なくそう答えると、言葉が続けて来る。

「ソナナ事ハ無イ、貴殿ハ我々ヲアノ男カラ解放シテクレタ恩人ダ。」

「……っ!!」

その言葉を聞いて僕は思わず泣きそうになってしまいが、それを押し殺してこう言った。

「最後に、言っておきたい事はありますか？」

「無い。モウ思イ残ス事モ無イカラナ」

「・・・そうですか。それでは、さようなら。」

その言葉と共に僕の足元は血の海と化していて、その近くにはいくつもの頭の潰された人だったものが存在している。

「・・・。」

胸の中で渦巻いている虚無感を感じながら通路の奥へと進んで行くのだった。

覚悟

僕は英雄になりたかった……。

おじいちゃんがいつも話してくれる英雄譚に出てくるどの英雄達も物凄くカッコよくて心惹かれる程に心躍った。

だからこそ、僕は「英雄」に憧れた。僕自身が「英雄」になりたいとも思った。

お爺ちゃんも僕の背中を押してくれた。

だからこそ、一念発起で迷宮都市オラリオに来たはずだった。

オラリオに着いたその日の夜に訳も解らず拉致されて、クリチャー怪人と呼ばれる存在に改造

されて、主犯格の男二人と僕と同じ被害者であるはずクリチャー怪人もどきと化してしまった人達を殺してしまった。

英雄と呼ばれる人達とは真逆の道を進んでいる、そんな気がしてならなかった。

「何やってるんだろ……、僕……」

そんな事を考えながら通路を歩いていると、反対側から白装束を身に纏った奇妙な二人組が歩いてきた。

「何だ、貴様は!?! 何処から入ってきた!?!」

何処から入ってきた？ふざけるな、お前らの仲間がここへ連れてきたんだろが!!

その言葉を聞いた瞬間、僕はその二人組に向かって走り出した。

「!?!」

ただの子供と思っていたのか逃げるものか思っていたようで二人組は向かってくる僕に対して体を硬直させる。

硬直した瞬間を狙って僕は回し蹴りを放ち、二人纏めて行動不能にさせる。

「ぐはっ!?!」「ぐげっ!?!」

回し蹴りをまともに受けた一人がもう一人を巻き込んで通路の壁に激突し、痛みで立ち上がることも無く地面に蹲る。

そんな二人組に僕はこう話しかける。

「ここから出るにはどう進めば良いんですか?」

そうやって問いかけるも返事がない。

気になった僕は二人組の首を触って脈があるかどうかを確認する。

そうした所、脈は完全に停止していた。つまり、二人組はあの回し蹴り一発で命を落としたということになる。

こうして見ると、本当に僕は普通^{人間}じゃなくなつたんだと自覚させられる。

怪^{クリーチャー}人と呼ばれる存在は人類^{モンスター}と怪物^{ハイブリッド}の異種混成な存在。

そんな存在にベル・クラネルはなつてしまった。

これからどうしようか、そんな事を考えながら二人組の死体を放置してその場から離れるのだった。

十分程歩くと新たな部屋の扉を発見した僕は息を殺して近づき、そつと扉を開いた。

その部屋は保管庫になっていて、その中には僕が口にした紫紺の結晶もとい魔石が大量に置かれていた。

それを見た僕はこう思った。

”ああ、美味しそう”だと。

ハツとなつて僕は口を抑える。

今、僕は魔石を見てなんで美味しそうだと思つたんだろう……。

そうか、僕はもうとつくに化け物になつてしまつたんだと否応でも理解せざるを得なかつた。

だつたら、僕はこのまま化け物のままで前に進んでいこうと覚悟を決めたその瞬間、僕は保管庫にある魔石を全て喰らつた。

僕、ベル・クラネルは怪人という化け物でありながら英雄を目指すことにした。

動き出す闇

魔石を全て食べた僕の身体は今までにないくらいに力が漲る感覚が感じ取れる。

「これが魔石を喰らった怪^{クリーチャー}人の力なのかな・・・」

そう呟きながら僕は保管庫を出ようとはせずに他にもなにか保管されていないかと物色を始める。

すると、見つけたのは武器の山だった。

僕はいつまでも素手で対処できるとは思えなかった為、その武器の山から一本の長剣を取り出した。

黒を基調とし、切っ先が炎の如き形状を取るその黒い長剣は妙に僕の手馴染んでいく気がした。

「ちようど良いや、この剣は詫び賃代わりに貰っておこう」

そう言つて僕は黒剣を腰に差し、保管庫を出ると大勢の白装束を身に纏った人達がい

た。

「よくも、我らが同志達を手にかけてくれたな・・・!!」

白装束の人達の中の一人がそう言ってくるのに対して僕はこう言った。

「ふざけるな、全てはお前達が招いた事だろう。それに、その報いを受けるのは必然だろう」

そう言いながら僕はさつき手に入れた黒剣を抜いた。

それを見た一人の白装束が声を上げる。

「そ、その剣は《ベーゼ・マーレボルジエ》!?!」

その男の言葉に他の白装束達がざわめき出す。

《ベーゼ・マーレボルジエ》っていうのか、この剣は……かっこいいな。

思わずのんきにそんな事を考えていると、最初に声を上げた白装束がこう言うてる。

「その剣はバルカ様が制作した呪カースウエボン剣の一つ! 第一等級武装の特殊武装スベリオルズなのだ、貴様のよ
うな薄汚い餓鬼が触れて良いものではないのだ!!」

そうやってまくし立ててくる白装束に対して僕はこう言った。

「知るか、そんな事」

その言葉を最後に僕は目の前にいた白装束を斬り捨てた。

斬り捨てられた白装束は悲鳴を上げること無く横に両断されて絶命する。

それを皮切りに僕は白装束達を血祭りに上げるために剣を振るい続ける。

剣を振るう度に鮮血が舞い散り、周囲を赤く染め上げていく。

最後の一人になった白装束に剣を振り下ろし絶命した事を見届けると、通路の奥に目を向ける。

「出て来いよ、そこにいるのは解っているんだ」

僕がそう言うと、通路の奥から現れたのは一人の女性。

「あくあ、せつかくの兵隊共をこんな殺つてくれやがってエ・・・。」

そう言いながら歩いてくる女性の纏っている雰囲気はさっきの白装束達とは別格だ。

「どう落とし前付けてくれンダア!!」

怒りを顕にしながら女性は剣で襲いかかってくる。

その時、僕はとてつもない違和感に襲われる。

女性の動きが遅過ぎる、これでは格好の的だがそんな事は関係ない。

白装束の仲間なら殺す、それだけだ。

そう思い、剣を振るつた。

ザンツツ・・・!!

「ぐぎやあああああああああああああああああつっ!!」

僕の一振の斬撃を受け、女は激痛による断末魔を上げる。

「クソガキがア~~~~~ツツ!!」

そう叫びながら女は懐からある物を取り出した。

『D』の刻印の入った珠のようなモノを取り出したかと思えば上から扉のようなものと女の間に割って入った。

僕は女に逃げられてしまった。

「くそっ」

悪態をつきながら剣にこびり付いた血を払い落とし、鞘に収めて出入り口を探し出す事を再開する。

あれからしばらく歩き回ったが、中々出入り口が見つからない。

それにつれて苛立ちも大きくなっていくのは気のせいじゃないはずだ。

すると、僕の目の前に地下水路らしき場所に辿り着いた。

更には言えば、ここは僕が今まで歩いてきた通路の出入り口だということだった。

僥倖だと思い、僕は右から左へ流れる水の流れに逆らって上流を目指すことにした。

すると、水中から魚のモンスターが飛び出してきたが、僕はすかさず抜剣して切り伏せる。

「ふう、初めてのモンスター撃破がダンジョンじゃなくて下水道かあ・・・。」

そんな不満を漏らしながら僕は倒したモンスターの魔石を一口で飲み込む。

魔石を口にしたことで多少の力の上昇は感じられるけど、さっきまでいた通路の保管庫の中にあつた魔石の方が質が良いと思った。

そう思いながら次は下水路の出入り口を見つけてことにした僕は足を動かすことにした。

一方、その頃……。

「くそつたれがあああああああああああああああああつ!!あのクソガキ、タダじゃおかねえぞおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

身体に包帯を巻き品性の欠片もない喚き声を上げているのはヴァレッタ・グレーデ。

七年前、この迷宮都市オラリオを混沌と殺戮で満たした闇派閥イヴァイルスの幹部である。

L v. 5の冒険者であり。二つ名は【殺帝】アラクニデ

人の命を奪うことを己の至上としている彼女は今も収まらぬ怒りの衝動を吐露し続ける。

その理由は一人の少年ベル・クラネルである。

その少年に一撃を貰い、深手を負わされたことに怒りを剥き出しに叫ぶ。

すると、一人の闇派閥イヴァイルスがヴァレッタに報告をする。

「ヴァレッタ様、報告します。怪人量産計画を行っていた者達が殺されていることが

判明いたしました。恐らくは……、あの子供が実行したものだと思われます」

その報告を受けたヴァレットタは瞳孔が開いた眼でこう言ってくる。

「んだと、じゃああのクソガキは唯一の生き残り完成品って事か……。」

いくら冷静さを取り戻したヴァレットタを見たその闇派閥イヴァイルスは次の報告を行う。

「次の報告です。実は……最悪な事に『天の雄牛』に与えるはずだった魔石が保管庫から全て消失しています。恐らくではありませんが、例の子供に……」

闇派閥イヴァイルスの報告が最後まで発せられることはなかった。

何故なら、ヴァレットタがその闇派閥イヴァイルスの首を自身の得物で切り裂いたからだ。

「オイオイ、フザケンじゃねえぞ!!あのクソガキ、『深層』のモンスター共の魔石を全部喰いやがったのか!?そうなつてくりやあ、階層主の魔石を喰ったことになりやがる……。」

今までにない事態にヴァレットタは動揺を隠せないでいた。

ただでさえ現状でも第一級冒険者の自身に深手を負わすほどの力を持つ怪人クリーチャーの少年が万が一にもどこぞの神に神フアルナの恩恵を授かればいよいよ手が付けられなくなってしまう事を瞬時に理解する。

そうして、ヴァレットタは大声で闇派閥イヴァイルスに命令を下す。

「てめえら、今すぐにあのクソガキを回収してこい!!手足を切り落としても構わねえ、どうせすぐに治つちまうからな!!ただし、この事を勘付かれんじゃねえぞ!!」

その命令を聞いた闇派閥^{イヴイルス}達は実行する為に動き始める。

出合い

下水路を進んでいき、ようやく外へと出ることが出来た僕は久しぶりに浴びる事になったのは陽の光ではなく月の光だった。

しかし、今の僕の状態であるなら昼間ではなく夜で助かったと言える。

何故なら、白装束達の返り血によって衣類が血塗れになっているからだ。

「……替えの服も奪って来るんだったな。」

過ぎてしまった事を口にしても意味がないと考え、今日身体を休める事の出来る場所を探すことにする。

まず最初の条件としてひと目を避けられる場所であることが前提だ。

それからどこかで服を調達しなくちゃいけない、いつまでもこんな血塗れの服を着てはいられないから。

そんな事を考えていると、数人の男達が僕の事を取り囲んでくる。

「へへっ、おいガキ随分と良さそうな剣をぶら下げてんじゃねえか」

下卑た声でそう言ってくるのはまさしく冒険者といった風貌の獣人の男。

周囲にいる男達も下卑た笑みを浮かべながら立っている。

「それで、僕に何か用ですか？」

男達の目的が解つていながらそう言った僕に対して獸人の男はこう言ってくる。

「なに簡単な話だ、お前の腰の剣を痛い目に遭う前に俺達に寄越せ。」

やっぱりという感情が僕の中で巡つた、こいつらの目的は《ベーゼ・マーレボルジエ》。見た目的に弱そうな僕がこの剣を持っているからたかりに來たつて事か……。

そう言ってくる男達に対して僕ははつきりと言つた。

「断る」

「なら、しようがねえな……。やっちまえ、お前ら!!」

「「おおおお!!」」

それを聞いた男達はさつきよりも醜悪な笑みを浮かべながら襲いかかってくるが、
怪人クリーチャーになつた僕にとつてこの程度は襲われた内に入らない。

しかし、僕は剣を抜かずに拳で迎撃をする。

襲い掛かつてきた全員は一撃で倒れる。

僕は男達から迷惑料として一時的に着れそうな服と金を全て貰つていく、その後は一瞥すること無くその場から離れるのだつた。

その後、僕は夜でも開いている呉服店に行き、替えの服を数枚購入してから奪つた服をゴミ箱に捨てて一夜を過ぐす場所を探すことを再開する。

しばらく都市を歩いて見つけたのが、廃れた教会だった。

今日はここで一晩過ごそうと思ひ、中に入ろうとした瞬間背後から数十人程の白装束の者達を取り囲んでくる。

「まさか、そつちから来てくれるとは思ってなかったな……。」

そう言いながら僕は服の入った紙袋を教会の中に放り投げてから剣を抜き、更に言葉を続けた。

「死ね」

「かかれ!!」

そう言ったのを皮切りに僕と白装束との戦いが始まる。

とは言ってみだが、所詮は蹂躪の延長線でありすぐに数十人いた白装束達は全員骸と化した。

「結局、何をしに来たんだこいつら。」

呆れながら骸になった白装束達に一瞥くれずにそう言っていると、教会の方から気配を感じ取り剣を構える。

「誰だ!!」

「うわあっ!!?」

振り向いたその先にいたのは一人の女神だった。

「どうしたんだい、少年……。こんな夜遅くに一人で出歩くなんて……。」
寝ぼけ眼でそう言ってくる女神は僕の事しか認識できていないようだ。

「夜分遅くに騒いでしまつて申し訳ありません、名を知らぬ女神様。」

僕はそう言つて頭を下げる。

「実は、少々訳ありでして一晩だけ泊めて頂けないでしょうか？」

僕がそう言つたと女神様はこう言ってくる。

「うゝん、別に構わないよ。でも、静かにしていてくれよ、ボクはバイトをして疲れて
いるんだ。」

そう言ってくる女神様に対してボクはこう言つた。

「感謝します、女神様」

そう言つて僕は教会の中に入り、一夜を過ごすのだった。

【ヘステイア・ファミリア】

教会の長椅子の上で一夜を過ごした僕は女神様よりも早く目を覚まして教会の周辺に散乱している死体を人目の付かない場所にへと運び込み、土の中にへと埋める。

その後、すぐに僕は昨日買ってきていた服に着替え、血と土で汚れた服を燃やして証拠隠滅をする。

それら全てが終わると、女神様が起きてきた。

「ふああくく、おはよう少年」

そう朝の挨拶を言ってくる女神様に僕も朝の挨拶で返す。

「おはようございます、女神様」

それを聞いた女神様がこう言ってくる。

「ああ、そういえば自己紹介がまだだったね。ボクの名前はヘステイア、炉の女神だよ。ボクの事は好きに呼んでくれて良いからね!!」

「それでは僕も自己紹介を。ベル・クラネルといます」

互いに自己紹介をすると、ヘステイア様がこう言ってくる。

「ベル君、良かったら朝食と一緒に食べないかい？」

「いいんですか?」

ボクが聞き返すと、ヘステイア様がこう言ってくる。

「もちろんさ、一人で食べるご飯は味気ないじゃないか。それとも、君は一人で食べるのが好きなのかい?」

その言葉に対して僕はこう言った。

「いえ、いただきます」

僕の言葉を聞いてヘステイア様が持つてきてくれたのはなにかを油で揚げた食べ物だった。

「ベル君。これはじゃが丸くんと言ってね、オラリオの名物なんだよ!!」

僕が聞く前に教えてくれたヘステイア様の言葉を聞いて一口頬張る。

揚げ立てではないにしろ、これは味は無いけど芋本来の甘さがお腹にズシンと来るけど満たされる感覚が心地良いな。

そう思いながらももう一口頬張ると、一個のじゃが丸くんを食べ終える。

「良い食べっぷりだね、たくさんあるからいっぱい食べると良いよ。それから塩胡椒で味を付けても美味しいよ!」

それを聞いた僕は二つ目のじゃが丸くんを手にとって塩胡椒で味を付けて頬張る。

すると、塩っ気が足されるとさらに芋の甘みが強調されて良いなと思っていたら次に

胡椒の刺激で引き締まる。

そこから僕は、夢中になってじゃが丸くんを食べた。

その姿を見ていたヘスティア様が優しく笑っていたことを僕は知らない。

お互い朝食を済ませると、ヘスティア様がこんな事を聞いてくる。

「ベル君は都市外からやってきた子だよ、その髪は目立つから見かければ気づくからね」

その言葉に対して僕はこう言った。

「・・・ヘスティア様、昨日僕が言ったことを覚えていますか？」

「ああ、何やら訳ありだと言っていたね」

「実は僕ベル・クラネルは人類と怪物モンスターが入り交じった存在、怪人クリーチャーなんです」

「へ？」

僕の告白にヘスティア様はきよんとしてしまふ。

「実はですね・・・」

そう言つて僕は自身に起こった出来事を全て話した。

すると、ヘスティア様は僕のことを優しく抱擁してくれた。

「それは辛かったね、よく頑張ったね」

そう言いながら頭を撫でてくれた。

その瞬間、目から大粒の涙がこぼれ出てくる。

「うう……っ、ひっ……ひぐうっ……」

止めどなく流れ出してくる涙滴は地面に落ちては消えていくのだった。

しばらくして、涙を出し切った僕はヘステイア様にこう言った。

「ヘステイア様、僕を貴女の眷族にして頂けませんか？」

「もちろんさ、ベル君!!」

こうして僕はヘステイア様の眷族となり「ヘステイア・ファミリア」結成となった。

「それじゃあ今から恩恵を刻むぜ!!」
ファルナ

「はい、ヘステイア様」

そうして、ヘステイア様が僕に『恩恵』を刻み、「ステイタス」を確認すると……。

「な、なんじゃこりや~~~~っ!?!」

「ヘステイア様、どうかしたんですか!?!」

突然、叫び声を上げるヘステイア様に僕が驚く。

すると、ヘステティア様は手早く羊皮紙に僕の「ステイタス」を書き写していき、見せてくれる。

「ベル君、これが君の【ステイタス】だぜ……」

なにやら疲れた様子のヘステティア様から手渡された羊皮紙に書き写されている【ステイタス】を確認する。

ベル・クラネル

L v. 7

力SSSS1890 耐久SSSS1460 器用SSSS1781 敏捷SSSS214

0 魔力10

幸運EX 怪人EX

【人怪融合】

モンスターム・ユニオン
ハイブリッド

・異種混成

・超越界律

・神理崩壊

・穢靈侵食

・穢靈侵食

【超越怪人】

オーバーロード
アベイロン・リバー

・無限再生

・無限成長
アベイロン・アウクセシス
 クリテイカルオーバー

・限界突破
ブレデター

【捕食者】

・完全回復
フルリカバリ

・怪物喰い
モンスター・イーター
 モンストルム・タレント

【才禍の怪物】

・超早熟する

・怪物が続く限り
りかい

効果持続

・怪物の丈により効果向上

「これは・・・」

スキルの所を見ると、怪人になった影響がはつきりと出ている。

普通では無いことを再認識させられる。

そう考えていると、ヘステイア様がこう言ってくる。

「ベル君、気にすることじゃないぜ」

「え？」

まるで今自分が考えていたことを見透かしているかの様な言葉に僕は戸惑う。

「どんなスキルを得ようとも君は君さ。それに、君は『英雄』になるんだろ?!」
「!!」

その言葉に僕は気づかされる。

僕は何のためにオラリオこに来たのかと・・・。

それは読んでいた英雄譚に出てくる英雄のようになりたいと思ったからだ!!

「そうですよね、こんな事でへこたれていたら英雄になる所か冒険者になる事も出来な
いですよね!!」

「その通りだぜ、ベル君!!」

こうして、僕の「ファミリア・ミイ眷族の物語」が始まるのだった。

冒険者登録

『恩恵』を授かった僕は「ステイタス」を書き写した羊皮紙の名前とL.V.だけを切り取った紙を持ってギルド本部にへと歩いて行く。

「あの、すみません。冒険者登録をしたいんですけど……」

ギルドに辿り着いた僕は受付まで行き、声をかけると眼鏡をかけたエルフの女性職員がこう言ってくる。

「冒険者登録ですね、それではこちらの紙に記載をお願い致します」

そう言われて僕はサラサラと登録紙に記載していく。

そうして書き終わった所でエルフの女性職員に手渡した。

すると、女性職員が顔を顰めた後こう言ってくる。

「申し訳ありません、L.V.の偽装は禁止されているのですが？」

まあ、確かに恩恵を授かったばかりの新人冒険者がいきなりL.V.7を名乗ればそういった反応になるのは当然だ。

そこで、僕は先刻更新してもらったばかりの「ステイタス」が記載された羊皮紙を女性職員の前に出してこう言った。

「これが先刻僕の主神に刻んでもらった『恩恵』^{ファルナ}から読み取ってもらった【ステイタス】です、これを見て貰えば信じて貰えますよ」

羊皮紙を受け取った女性職員が目を通すと驚愕の表情を浮かべながら僕と羊皮紙を交互に見てくる。

それが終わると、女性職員は頭を下げて謝罪をしてくる。

「大変申し訳ありませんでした、クラネル氏。確かにここに記載されている【ステイタス】は本物のようです」

そう言ってくる女性職員に対して僕はこう言った。

「仕方が無いですよ、今日初めて冒険者登録をしに来た人がLv. 7なんて言えば嘘をついているんじゃないかって疑うのは当然ですよ」

「お氣遣い感謝します」

そう言つて女性職員は頭を下げる。

「それじゃあ、僕は帰ります」

「お待ちください」

そう言つて踵を返そうとしたら女性職員に止められた。

「なんですか？」

「冒険者登録をされに来た方にはギルド職員が専属アドバイザーを務めさせて頂くので

…

「じゃあ、あなたがいいです」

「え？」

僕の言葉を聞いて女性職員の人はキョトンとした表情を浮かべる。

「貴女が良いと言ったんですよ」

「は、はい！解りました、それでは冒険者ベル・クラネル氏のアドバイザーは私エイナ・チュールが勤めさせていただきます」

「解りました、それじゃあエイナさんこれからよろしくお願いします」

「こちらこそよろしくお願いします、クラネル氏」

女性職員もといエイナさんと互いにこれからの事で挨拶し合った後、僕にこう言ってくる。
「クラネル氏は冒険者となられたばかりなので初心者講習を受けることができますが、どうされますか？」

「是非お願いします」

「解りました、こちらの別室にいらしてください」

そう言われて案内されたのが、黒板と教卓と机と椅子が置かれているだけの部屋だった。

「よいしょっと」ドスン

そう言つてエイナさんは教卓の上に軽く三重は越える大量の教材らしき本の山が置かれていた。

「それでは、始めましょうかクラネル氏」

「解りました」

こうして、エイナさんによるダンジョン講習が始まるのだった。

講習が終わると、外はすっかり暗くなつていて今日の所はダンジョン探索はお預けだなと判断した。

「お疲れ様、ベル君」

「ありがとうございます」

エイナさんの僕の呼び方が柔らかくなつたのは名字呼びに慣れていない僕が頼んだからだ。

そして、僕はエイナさんの講習をなんとか合格することが出来た。

「それじゃあ、僕はこれで」

「うん、明日はダンジョンに潜るんだよね」

「はい、そう思っています」

エイナさんが明日の予定を聞いてくるので答えると、こう言葉を続けてくる。

「それなら絶対に忘れちゃいけない事はなんだったかな？」

「冒険をしない、でしたね。コレばかりは賛同しかねますけどね」

「安全にダンジョンを探索するための言葉だからちゃんと守ること、解った!!」

「…善処はしますよ」

そう言つて僕は神様の待つ本拠^{ホーム}へと帰るのだった。

「おつかえりく、ベル君!!」

本拠^{ホーム}に帰ると、神様が抱きついてくるのを受け止める。

「危ないじゃないですか、神様。そんな勢い良く来られたら倒れちゃいますよ」

そう言いながら僕は神様を降ろす。

「実はね、今日屋台の店長がボクに初めての眷属が出来たお祝いにこんなにじゃが丸くんをくれたんだ!!」

「それは良かったですね、それじゃあ早速食べましょう」

「うん」

そうして、僕と神様はじゃが丸くんを頬張るのだった。

食事が終わると、神様がこう言ってくる。

「そういえばベル君は今日ダンジョンに潜ったのかい？感想を聞かせておくれよ」

「いえ、今日は冒険者登録を済ませた後はずっとアドバイザーになってもらったギルド職員にダンジョンのことを教えてもらってました。」

「へえ、それじゃあダンジョンには潜ってないんだね」

「はい。でも、明日は潜るつもりですよ。」

神様の言葉に僕はそう言いながら水を飲み干した。

「それじゃあ、おやすみなさい神様」

「うん、おやすみベル君」

明日に備えて僕は神様よりも先に眠りについた。

ダンジョン

冒険者登録を済ませた翌日、眼を覚ました僕は神様の朝食（昨日のじゃが丸くん）を用意してから装備を整えて本拠^{ホーム}を出る。

「行つてきます、神様」

そう言つてからダンジョンを目指して歩き出すのだった。

ダンジョンに向かっている途中、ある視線が僕に向けられている事に気づいた。

その視線というのが、値踏みをするようなそんな感じだ。

ただ、何かを仕掛けてくる様子はなくひとまはこちらも様子見を決め込むことにした。

その後は何事もなくダンジョンに辿り着いた僕は冒険者として足を踏み入れると、地上とは別の場所だと否応でも解らされる。

張り詰めた空気がベツタリと張り付いているような感覚がある。

そんな感覚を感じながらもダンジョンの奥にへと足を進めていくと、目の前でゴブリンが三匹生み出された。

ダンジョンからモンスターが現れるところを始めて見た僕はどういう構造になつて

いるのかを疑問に思ったが、それは気にしないことにした。

僕は剣を抜くこと無く蹴りで先手必勝とばかりにゴブリン三匹を屠り、魔石を回収すると咀嚼する。

「不味い」

その一言だけを漏らして更に下の階層を目指して足を運んで行く。

それから二・三・四・五・六・七・八・九・十・十一・十二階層を踏破していき、中層である十三階層に辿り着いた。

「これじゃあ足りないな」

そう言いながら上層で集めた魔石や怪物素材ドロップアイテムの入った背囊の重みを感じて進んでいくと、中層のモンスターであるアルミラージとヘルハウンドが襲い掛かってくる。

それも数十体の群れ単位でだ。

だけど、それでも僕の相手にはならず全て魔石や怪物素材ドロップアイテムに変え、背囊の中に詰め込んでいく。

そこからはさつきと一緒で各階層を踏破していき、迷宮モンスターレックスの孤王ゴライアスの出現する十七階層まで降りてきた。

「さて、階層主の魔石ってどんな味がするんだろうな」

そう言いながら進む僕はゴライアスが出没する場所・嘆きの大壁に辿り着くと、そこ

には黒髪黒褐色の巨人が立っていた。

それを確認した僕はここで初めて剣を抜き、背囊を手放した瞬間一気に駆け出した。ドサツと背囊が地面に落ちた音に反応してゴライアスが視線を向けようとした瞬間、両足首が切断される。

『ッ!?!』

突然のことにゴライアスは叫び声を上げようとするもそれは出来なかった。

何故なら、既に首が両断されているからだ。

その瞬間、ゴライアスは灰へと変わり果てると共に魔石と怪物素材が残った。ゴライアスの歯牙

こうして、僕の初めての階層主討伐は圧勝で幕を閉じ、それと共にゴライアスの巨大な魔石を運ぶために初めてのダンジョン攻略も幕を閉じることになった。

地上に戻ってギルドに向かうと、大騒ぎになるもなんとかゴライアスの魔石の換金を済ませることが出来た。

ゴライアス階層主の魔石の換金総額1500万ヴァリス、階層主の魔石だけでこれだけの金額になるとは思わなかったなどと思いつながらまだまだ空きのある背囊の中を満たす為にもう一度ダンジョンへと潜ることにした僕は金の入った麻袋を魔石などが入った背囊とは別の背囊に入れてからダンジョンへと戻っていくのだった。

ダンジョンに戻ってきた僕は上層をさっさと踏破し、中層も十七階層まで降りてきた。

嘆きの大壁に戻ってくると、ミノタウロスが十数体の群れとして誕生して来る。

そして、僕を見つめるや否や襲い掛かって来る。

それに対して僕は剣を抜き放ち構えようとした時ある可能性を見出した。

それは魔石の摂取による能力上昇ステータス・アップが見込めるのであればモンスターの血肉を喰らえばどうなるのかという事だった。

魔石が可能であるならば血肉でも可能であろうと判断した僕は剣を抜かずに一番近くまで来ていたミノタウロスの喉に噛み付き、喰い千切ると共に呑み込んだ。

すると、僕は身体の奥底から力が溢れて来る感覚を味わった。

これで確証を得られた、怪人クリーチャーとなった僕は魔石だけでなくモンスターの血肉でも力を上昇させられる…!!

予想以上の成果に満足出来た僕は強化された肉体のみでミノタウロスを殲滅し、魔石と怪物素材を回収し、他のモンスターの魔石なども集めながら地上に戻るのだった。

地上に戻り、換金と買い物を買って済ませて本拠ホームに帰って来ると、バイトで疲れたヘステイア様が寝台ベッドで休まれていた。

僕はヘステイア様を起こさないように夕食の準備にへと取り掛かる。

まず最初に汁物スープから作っていき、次にサラダ、副菜、主菜メインを作り終わるとヘステイア様を起こす。

「ヘステイア様、起きて下さい。夕食の用意が出来ましたよ」

「うん、分かったよべるくうん……」

眼をしょぼしょぼさせながら席に着くヘステイア様に眠気覚ましに冷水をコップに注いで手渡すとヘステイア様は意識を覚醒させる。

「ありがとう、ベル君」

「いえいえ、さつそく食べましょうヘステイア様」

「うん!!」

『いただきます』

そうして、僕とヘステイア様は夕食を楽しむのだった。

夕食を食べ終えて片づけを済ませると、本日の「ステイタス」更新を行う。

「ベル君、たった一回で「ステイタス」が劇的に変化するんだったらこの下界は第一級冒険者だらけだよ」

「それでも、僕は一刻も早く強くなりたいです」

ヘステイア様とそう話しながら「ステイタス」を更新していくと、大声が響き渡る。
「なんだいこれはくくくくくくくっ!!?」

「どうかしたんですか、ヘステイア様？」

「ちよつと待っていてくれベル君、今書き写すから!!」

ヘステイア様はそう言って手早く羊皮紙に「ステイタス」書き写し見せて来る。

ベル・クラネル

L v. 7

力SSS1890↓2134 耐久SSS1460↓1718 器用SSS178

1↓2099 敏捷SSS2140↓2590 魔力I0

幸運EX 怪人EX

【人怪融合】

モンスターム・ユニオン

ハイブリッド

・異種混成

ネオイレギュラー

・超越界律

ステイタス・バグ

・神理崩壊

アニメイロジョン

・穢霊侵食

オブバード

【超越怪人】

・無限再生
アベイロン・リバー

・無限成長
アベイロン・アウクセシス

・限界突破
クリティカルオーバー

【捕食者】

フルリカバリ

・完全回復

モンスター・イーター

・怪物喰い

モンスターム・タレント

【才禍の怪物】

・超早熟する

りかい

・怪物が続く限り効果持続

りかい

・怪物の丈により効果向上

モンスターム・アムプロシア

【怪物恩寵】

オーバーイート

・強喰増幅

ベルゼブル

・無限暴喰

タイラント

・尽喰貪王

アソルト・コピー

・完全擬態

ビルドアップ

・成長増強

【グラトニー・サーベラス】

・エンチャント
付与魔法

・炎属性・雷属性

・マジックドレイ
魔力吸収

・ダメージドレイ
損傷吸収

・エナジードレイ
生命吸収

・カースドレイ
呪詛吸収

・詠唱式『幾ら喰らえどもこの器から溢れ零れでる飢餓は満たされぬ』『美食でも悪食でも満たされぬ』『既にこの身は穢され侵食され禊も浄化も救恤いすら皆無く罪過の烙印を刻み込む』『飢餓の象徴たる涎は大地を侵し、大海を穢し、大空を閉ざす』『食物を喰らい、怪物を喰らい、精霊を喰らい、他者を喰らい、恩恵を喰らい、呪詛を喰らい、病魔を喰らい、意思を喰らい、誇りを喰らい、魂魄を喰らい、我が身すらも喰らう底無し穴の幽鬼』『森羅万象全て喰らい貪り味わい飲み込み己が血肉と化す』『たとえこの身この魂が無間の地獄に墮ちようとも喰らい続ける』『この身はいずれ神々をも喰らおう』『蹂躪し数多を飲み干し平らげる 暴喰の霸道ここに極まれり』『暴悪に喰らい尽くす原罪の一角たる暴喰の化身が胎動する』

【アウレー・エウアンゲリオン】

・回復魔法

・詠唱式『奏でられるは堅琴の音色』『その音色は優しき魂の平穩へと導く静寂の園へと通ずる』『静寂の園で響き渡るは聖鐘樓の福音』『静寂なる悠久の時間はゆつくりと流れる』

「これは……」

僕は驚きを隠せなかった、たかが一度モンスターを喰らっただけでこれほどの魔法二つを得るほどの経験値が得られたという実感が無い。

すると、ヘステイア様が驚く僕に対してこう言ってくる。

「ベル君、今日ダンジョンでなにがあったのか教えてくれるかい？」

「はい、解りました。」

そうして、僕はヘステイア様に今日ダンジョンの出来事を全て話した。

「モンスターを食べるなんて身体の方に異常はないのかい？」

「はい、それどころか身体の奥底から力が溢れ出てくるんですよ」

ヘステイア様の言葉に僕はすこぶる調子が良い事を伝えるのだった。

「それなら良いんだけど無茶だけはしないでくれよ、君に何かあつたらボクはまたひとりぼっちになってしまう。」

「大丈夫ですよ、ヘステイア様。僕は絶対にヘステイア様を一人にはしませんよ」

「ベル君」

僕の言葉に感動したのかヘステイア様は笑みを溢していた。

「それじゃあ僕はダンジョンに行つてきますね」

「うん、行つてらっしゃい!!」

そうして、僕はヘステイア様に見送られてダンジョンにへと向かうのだった。

ダンジョンに着くと、僕は上層―中層を早々に踏破し下層グレートフォール巨蒼の滝に辿り着く。

「ここが第二セカンドの死線……」

そう呟きながらも僕は足を進めていくと、水中からモンスターが飛び出してくる。

アクア・サーペントが三匹、ブルークラブ四体が一齐に襲いかかってくるのに対して

僕は剣で一太刀で切り捨て、魔石ドロップアイテムと怪物素材を回収してからさらに下層にへと降りてい

くのだった。

深層

更にダンジョンの下層に向かって降りて行くと、僕はついに『トゥルー・ライン真の死線』である深層に辿り着くのだった。

三十七階層『ホワイトパレス白宮殿』

ダンジョンの最大危険層域に足を踏み入れ歩を進める僕は襲い掛かって来るモンスターを粉碎していく。

すると、ここで僕はある気配を感じ取った。

その気配は現れては消え失せるといふ事を繰り返している、それが気になった僕はその不思議な気配がする場所にへと向かうのだった。

辿り着いたその場所は闘技場コロシアムのような場所で、その中ではモンスター同士の殺し合いが行われていた。

「こんな場所もあるんだな……」

そう言いながら僕は闘技場コロシアムの中にへと足を踏み入れた瞬間、モンスター達が異分子である僕を排除しようと咆哮を上げ敵意を、殺意を纏いながら迫って来る。

比喩抜きに僕は闘技場コロシアム中にいたモンスター全ての標的になったようだが、迫り来る怪

物達の大軍を見て思わず笑ってしまい、こう呟いた。

「せっかくだから魔法を使ってみよう」

『幾ら喰らえどもこの器から溢れ零れでる飢餓は満たされぬ』『美食でも悪食でも満たされぬ』『既にこの身は穢され侵食され禊も浄化も救恤いすら皆無く罪過の烙印を刻み込む』『飢餓の象徴たる涎は大地を侵し、大海を穢し、大空を閉ざす』『食物を喰らい、怪物を喰らい、精霊を喰らい、他者を喰らい、恩恵を喰らい、呪詛を喰らい、病魔を喰らい、意思を喰らい、誇りを喰らい、魂魄を喰らい、我が身すらも喰らう底無し穴の幽鬼』『森羅万象全て喰らい貪り味わい飲み込み己が血肉と化す』『たとえこの身この魂が無間の地獄に堕ちようとも喰らい続ける』『この身はいずれ神々をも喰らおう』『蹂躪し数多を飲み干し平らげる 暴喰の霸道ここに極まれり』『暴悪に喰らい尽くす原罪の一角たる暴喰の化身が胎動する』

【グラトニー・サーベラス】

詠唱を完成させ魔法名を言った瞬間、僕の身体と剣は燃え盛る赫焔と激しく迸る金雷を纏っている。

「行くぞ」

その言葉を最後に僕は怪物達の大军にへと突撃する。

バーバリアン、ルー・ガルー、スカル・シープ、ペルーダ、スパルトイ、リザードマ

ン・エリート、オブデিশアンソルジャーを瞬きの間に魔石や怪物素材ドロップアイテムにへと変えて行くが、ここで違和感に気が付く。

その違和感というのがモンスターが減っていない事だ。

すると、背後からルー・ガルー二匹が襲って来るが回転斬りで対応すると正面の壁からモンスターが二匹誕生する。

「チッ」

僕は思わず舌打ちをしてしまうが、丁度良いとまで思ってしまった。

際限なく誕生うまれするのなら今まで溜めこんでいた精神的疲労ストレス解消に利用しようと考えた。

そう決めた僕は地面に落ちていた魔石数個を拾い上げ喰らったその瞬間、赫焱ほのおと金雷いかづちの勢いが増幅しモンスターを焼いている。

「はあああああああああああああああああああつ!!」

炎雷を纏った肉体で同じく焱雷を纏う長剣を振るいモンスター全てを爆砕して見せた。

更に今以上にモンスターが生み出されないように壁に斬撃と魔法を刻み込んだ。

その後、魔法を解除し一息入れるのだった。

エイナさんから聞いて居たダンジョンの壁は傷つけられると修復の為にその間モンスター生み出さない事を。

その特性を利用した僕は大量の魔石と怪物素材ドロップアイテムを手に入れる事が出来た。

しかし、大量の魔石は疲労回復の為に半分以上が僕の胃袋に消えてしまった。

その為、僕は更に魔石を求めて深層にへと降りて行くのだった。

そうして、四十九階層に辿り着くと山羊型の獣人のモンスター・フオモールが大挙して襲って来る。

「消えろ」

その一言だけで言い瞬殺した跡、魔石を回収した時点で背囊の容量が限界を迎えたため地上に戻る事になった。

地上に戻つてくると、ギルドに訪れて魔石を換金し終わると真っ直ぐに本拠ホームに帰るとそこには優男風の男神と犬シアンスロープの女性がいました。

「おかえり、ベル君」

そう言つて僕を出迎えてくれるヘステイア様に問いかける。

「ヘステイア様、こちらの男神と眷族の方は……？」

「自己紹介が遅れてしまったな。私は『ミアハ・ファミリア』主神のミアハだ。こっちは私の眷族でナーアザだ」

「初めまして……、ナーアザ・ミリスイス……です」

そう言つて自己紹介してくる犬シアンスローブ人の女性。

「初めまして、僕はヘステイア様の最初の眷族でベル・クラネルといひます」

僕も間髪入れずに自己紹介をするのだった。

何故、この二人が来ているのか疑問に思ったがミアハ様の次の言葉で得心する。

「私達の派閥ファミリアは商業系で、『青の薬舗』という店をしているのだ。ナーアザは薬師なのだ」

「なるほど、宣伝という意味でもということですね」

「まあ、そういうところだ」

中々に商魂あるな、この神様と内心思いながらミアハ様が懐から青い液体の入った試験瓶を取り出した。

「それでは、ベルよお近付きの印にこれを渡そう」

そう言つてくるミアハ様に言われるままに受けとるところ言つてくる。

「それはさつき出来立ての回復薬ホーションだ、役立たせてくれ」

「いや、売り物を無料では受け取れませんよ!!」

「なに、タダとは言っておらんよ。今後とも良き隣人でありたいためだ」

「ホント商魂逞しいですね・・・」

そんな会話をした後、ミアハ様達は帰っていくのだった。

ミアハ様達が帰られた後、僕と神様は夕食を済ませて明日に備えて眠るのだった

詭弁

ミアハ様達と顔合わせをした翌日、僕は軽く腹拵えをして背囊を五つに増やしてからダンジョンに向かう。

ダンジョンに着くと、昨日同様に上層と中層を早々に踏破し下層に辿り着く。

そして、僕は下層のモンスターを相手に魔石や怪物素材ドロップアイテムを採取しながら進んでいくと、水中からブルー・クラブの大群が大挙して襲ってくる。

それに対して僕は遭遇瞬殺と言わんばかりの速さで屠り、魔石と怪物素材ブルー・クラブの瞬殺へと変えるのだった。

それらを回収し更に下に降りていくのだった。

二十七階層まで降りてくると、僕は妙な気配を感じ取り正規ルートから外れて小さいルム広間に入るのだった。

その瞬間、僕の後ろから見覚えのある白装束達ルムが小広間に大勢で押し寄せてくる。

「またお前らか・・・」

。 嫌悪と憎悪丸出しの表情をしながら僕はそう言うと、白装束がこう言ってくる。

「死ねえ、化け物があつ!!」

そう言うと同時に白装束共が各々の得物を持って襲いかかって来る。

僕は担いでいる背囊を手放した瞬間、剣を抜いて白装束共を血飛沫を上げながら斬り捨てていく。

「馬鹿な・・・、あれだけの数の同士達を相手にして返り血も浴びずに無傷だと・・・っ!!」

「さつきまでの威勢はどうした、同志達という奴等がいなきやダメなのか?」

「ふざけるな、貴様なんぞこの私だけで十分だ!!死ねえ!!」

「お前が死ぬ」

叫びながら剣を持って振り下ろしてくる白装束を僕は頭から兜割りで一刃両断した。

白装束全てを塵殺したことを確認した僕は死体をそのままにして下の階層に降りていく。

その後、僕は苛立ちを発散させるためにモンスターに八つ当たりをしていくが魔石と怪物素材はもちろん回収する。

そうしている内に持ってきていた背囊は全て隙間なく詰め込まれている為、今日のダンジョン探索はここまでにすることにした。

地上に戻つてくると、エイナさんに呼び出されて個室にへと案内された。

「ベル君、ここ三日会ってなかったけど何をしていたのかな？」

「別に、ダンジョン探索をしていただけですよエイナさん」

「それなら到達階層とかの更新とかしなくちゃいけないから報告に来てもらわないといけないんだよ」

「そうだったんですか、以後気を付けますね」

「本当にお願ひね、それじゃあこの三日で到達した階層を教えて貰っても良いかな？」

僕は軽く注意を受けた後、エイナさんはそう言いながら記録用紙を取り出し羽ペンに墨を付ける。

「四十九階層です」

「・・・なんて？」

「だから、四十九階層です」

到達階層を伝えると、エイナさんはもう一度聞いてくるため再度答える。

「四十九階層~~~~~!!!?」

少し時が止まったかと思えばいきなりエイナさんは大声でそう叫ぶのだった。

「エイナさんいきなり叫ぶのは止めてください。耳が痛いです」

「そりゃ、大声にもなるでしょ!!君はまだ冒険者になって日が浅いんだからそんな深い階層まで潜ってるなんて思わないよ!!」

僕がエイナさんに文句を言うと、エイナさんは勢いそのままに捲し立ててくる。

「別に僕がどれだけ進もうと関係ないじゃないですか」

「それでもいくら君がLv. 7とは言ってもまだ深層に挑むのは早計過ぎるよ!! そんな無茶してたらいつか本当に命を落とすしちゃうよ!!」

「それがなにか問題でも? 生きとし生ける者全て等しく死がある、それは当然ですよ」

「そう、だから〃冒険者は冒険しちやいけない〃の!!」

「だけどそれは詭弁でしかない」

「なっ!？」

僕の言葉にエイナさんは驚愕の表情を浮かべる。

「話がそれだけなら僕はもう帰りますね、さようなら」

そう言つて僕は個室を出て換金所に向かい、集めた魔石等を換金してから本拠ホームにへと帰るのだった。

僕が本拠ホームに戻つてくると、ヘステイア様が出迎えてくれた。

「おかえり、ベル君!!」

「ただいま帰りました、ヘステイア様」

僕は満面の笑みで出迎えてくれるヘステイア様に感謝しながら夕食を食べるのだった。

私、エイナ・チュールは個室で受け持つことになった第一級冒険者の少年の事を考えていた。

「はあ・・・」

「どうしたの、エイナそんな深い溜め息ついちゃって幸せが逃げちやうよ？」

「ミイシャ・・・」

この子は私の同僚のミイシャ・フロット、仲の良い友人である。ちやうど今休憩中のようで私のところまでやって来ていた。

「実はね・・・」

私はさつきあつた出来事をミイシャに話した。

「えつ、白兔みたいな子がL.V. 7!?しかも十四歳でもう深層の四十九階層に到達したの!?!」

「うん」

ミイシャの言葉に同意すると、さらに言葉を続けて来る。

「でも、幾らなんでも嘘なんじゃないの?」

ミイシャの言いたいことは分かる、私だって人伝で聞いたら嘘をついていると判断してしまふ。

しかし、ベル君は昨日深層の魔石を大量に換金所に持ち込んだということは把握しているから間違いなく第一級冒険者並みの実力を兼ね備えていると言えてしまうのだ。

「それで私」冒険者は冒険しちやいけない」って言ったの、そしたら・・・」

「詭弁」だって言われちゃった」

「うわぁ・・・」

あんなハツキリと否定されるとは思ってもみなかったなあ。

何がベル君をあそこまで駆り立てているんだらうか。

私はその事を考えることになってしまふのだった。

強制任務（ミツシヨン）

エイナさんに呼び出された翌日、僕は今日も早朝からダンジョンに潜っている。

「グウオオオオオオオオオオオオツ!!」

咆哮を上げて襲いかかってくるバーバリアンを一太刀で屠ると魔石を回収し、先を指して進んでいく。

そうして、やって来たのは闘技場^{コロシウム}。

僕は良い稼ぎ場所と魔法に慣れる為の修練場所として使うことを決めていた。

一步闘技場^{コロシウム}に入ると、最初に入った時同様に一斉に僕めがけて襲いかかってくる。

それを僕は表情を一切変えずに剣を片手に斬り込んでいくのだった。

『幾ら喰らえどもこの器^みから溢れ零れでる飢餓^{うえ}は満たされぬ』『美食^{グルメ}でも悪食^{あくじき}でも満たされぬ』『既にこの身は穢^おされ侵^か食^かされ禊^すも浄化^{じやうか}も救恤^{すく}いすら皆^{みな}無く罪過^{ざいご}の烙印^{らくいん}を刻み込む』『飢餓^{うえ}の象徴^{しょうちゆう}たる涎^{ぜん}は大地^{つち}を侵^かし、大海^{うみ}を穢^おし、大空^{そら}を閉^そざす』『食物^{じき}を喰^くらい、怪物^{もつ}を喰^くらい、精霊^{せいりやう}を喰^くらい、他者^た者を喰^くらい、恩恵^{おんゑ}を喰^くらい、呪詛^{のろい}を喰^くらい、病魔^{やまひ}を喰^くらい、意思^{いし}を喰^くらい、ほこりを喰^くらい、魂魄^{たましい}を喰^くらい、我が身^みすら喰^くらう底^{そこ}無し穴^{あな}の幽鬼^{ゆうき}』『森羅万象^{しんらばんざう}全て喰^くらい貪^くり味^{あじ}わい飲^のみ込^こみ己^{おのれ}が血肉^{けつにく}と化^かす』『たとえこの身^みこの魂^{たましい}が無間^{むかん}

の地獄に堕ちようとも喰らい続ける』『この身はいずれ神々をも喰らおう』『蹂躪し数多を飲み干し平らげる 暴喰の霸道ここに極まれり』『暴悪に喰らい尽くす原罪の一角たる暴喰の化身けものが胎動する』

『グラトニー・サーベラス』

魔法を発動させ赫焔ほのおと金雷いかづちに包まれた僕の攻勢は苛烈さが増し無限に湧くモンスター達を止まることなく撃破していく。

そして、前回と同様に壁に傷を付けてモンスターが湧かないようにした後、僕は全ての魔石ドロップアイテムと怪物素材を回収するのだった。

その時、壁が崩れある金属が顔を出した、その金属は超硬金属アダマンタイト。

突然発掘？出来た超硬金属アダマンタイトを全て回収を終えると、僕は地上にへと戻るのだった。

地上に戻ると同時に管理機関キルドに行く、エイナさんがやって来てこう言ってくる。

「ベル君、これ…!!」

そう言いながら差し出してきたのは管理機関キルドの徽章が押印された封筒だった。

「なんですか、これ？」

僕が問いかけると、エイナさんはこう言ってくる。

「[ヘスティア・ファミリア]に「強制任務の要請です！」

強制任務、聞く限り面倒な気配がするなあ……」

僕がそんなことを考えながら封筒の中身を確認するとそこに書かれていた強制任務の内容は……。

「……遠征」

派閥には等級がありS〜Iまである、遠征は等級Dから義務付けられている。

つまり、「ヘスティア・ファミリア」が等級D以上だと認定されたということだ。

「……はあ、面倒だな」

そう言いながら僕は魔石の換金を済ませると、遠征に向けての準備のために一旦本拠ホームに戻るのだった。

本拠ホームに帰つてくると、ヘスティア様はまだバイトから帰ってきていないようだった。

今から準備が整い次第遠征に行くという報告をしたかったのだが、いないのならばよ
うがないとして置き手紙を書いておくことにした。

手紙を書き終えると、僕は干し肉などを購入しダンジョンに向かうのだった。

邂逅

遠征の準備を整えて僕はダンジョンへ向かっている途中背後に気配を感じ取り振り向き様に跳んで距離を取る。

すると、そこには緑と白の給仕服を着た鈍色の髪の少女が立っていた。

「ごめんなさい、驚かせちゃいましたね」

「いえ、こちらこそすみません」

そう言ってくる少女に対して謝罪すると、少女は自己紹介をしてくる。

「私はシル・フローヴァです、この『豊穡の女主人』で給仕をしています」

「これはどうもご丁寧に…、僕はベル・クラネルといいます。〔ハステイア・ファミリア〕所属の冒険者です。それで何か御用ですか？」

互いに自己紹介を済ませると、僕はシルさんに話しかけて来た訳を聞く。

「それはですね、少しでもダンジョンで疲弊している冒険者さんの為にですね英気を養ってもらおうと思ってお店への客引きをしているんです」

「そうでしたか、後ろから話しかけるのは止めた方がいいですよ。襲撃者と勘違いされてたら大変な事になりますよ」

「そうですね、以後気を付けますね」

そう言ってからうふふと笑うシルさんに僕は大丈夫かと思つた。

すると、店の方から怒声が聞こえて来る。

「シル、いつまでくつちやべってるつもりだい!!」

その言葉を聞いてシルさんは店に戻りながらこう言つて来る。

「それじゃあ、ベルさんもいらして下さいね!!」

そう言つてシルさんは店の中にへと入つて行きその姿を見届けた後、ダンジョンに向かうのだった。

ダンジョンへと潜り、五階層まで降りて来ると目の前に上層では見る事の無いモンス
ターが現れる。

「ミノタウロスがなんでここに…?」

「ヴモオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!」

疑問に思っているとミノタウロスは咆哮ハウルを上げながら拳を放つてくるが、その拳を片

手で受け止め握り潰した。

「ヴヴォツ!？」

あり得ない光景にミノタウロスは呻き声を上げるが、僕が間髪入れずに下顎を蹴り砕くと魔石と怪物素材ミノタウロスの角に変わるのだった。

「なんで上層ここにミノタウロスが居たんだろ…？」

「あの…」

その疑問に頭を巡らせていると、後ろから声を掛けられて振り返るとそこには金髪金目の少女が立っていた。

「何か用ですか」

「この辺でミノタウロスを見ませんでしたか？」

「それなら倒しましたよ、はい魔石と怪物素材ドロップアイテム」

「!! ごめんなさい」

少女の問いに対して答えると、いきなり謝罪をされた。

「なんであなたが謝るんですか？」

「そのミノタウロスは私達が逃がしてしまったから…」

「そう言う事ですか」

突然の謝罪に驚いた僕の問いに少女の答えを聞き納得をする。

「まあ、僕には実害が無かったので別に構いませんよ」

「でも・・・」

「どうせ死んでも僕達はただの肉の塊になるだけですし」

「!？」

「それじゃあ、僕は先を急ぎますんで」

「待って・・・」

僕は何か言って来る少女を無視して走り出すのだった。

階層主討伐

金髪金目の少女と別れ、遠征を再開した僕は上層・中層・下層を早々に踏破し深層に降り立った。

「さて、始めるか」

そうやって僕はダンジョン攻略を開始する。

「グウオオオオオオッ!!」

「邪魔」

「ギャアアアアア!!」

紅色の肉食恐竜^{モンスター}であるブラッドサウルスを一撃で屠り魔石を喰らうと、力が漲つてくるのが分かる。

「これで十五」

そうやって撃退したモンスターの魔石を喰らい「ステイタス」を成長させながら深層を進んで行き、三十七階層「白宮^{ホワイト・パレス}殿」の最奥の大広間^{ルーム}へ辿り着く。

僕はある事を考えていた、それは階層^{モンスター・レックス}主の強制出産だ。

人間でもモンスターでもない未知の存在^{ウィルス}に対してダンジョンがどのような反応を示

む』『飢餓うえの象徴しょうこたる涎ぜんは大地つちを侵し、大海うみを穢し、大空そらを閉ざす』『食物を喰らい、怪物を喰らい、精霊を喰らい、他者を喰らい、恩恵を喰らい、呪詛のろいを喰らい、病魔やまいを喰らい、意思を喰らい、誇りを喰らい、魂魄たましいを喰らい、我が身すらも喰らう底無し穴の幽鬼』『森羅万象全て喰らい貪り味わい飲み込み己が血肉と化す』『たとえこの身この魂が無間の地獄に堕ちようとも喰らい続ける』『この身はいずれ神々をも喰らおう』『蹂躪し数多を飲み干し平らげる 暴喰の霸道ここに極まれり』『暴悪に喰らい尽くす原罪の一角たる暴喰の化身けものが胎動する』

〔グラトニー・サーベラス〕

魔法名を言い終わった瞬間、僕の身体は炎雷を身に纏い地面を蹴り碎き疾駆はしる。

立ち塞がろうとするスパルトイの大軍を剣の一振りで粉碎し、逆杭バイルを壁として利用しようとも遠雷を纏った剣の斬撃によって切り裂かれていく。

そして、全ての障害を薙ぎ払う所まで来た瞬間、一本の長大な逆杭バイルが出現する。

その逆杭バイルは全長六Mほどもある剣のようにも見えた。

ウダイオスはその剣のような逆杭バイルを残された右腕に装備しゆつくりと振りかぶるのだった。

その光景に頭の中で警鐘が鳴り響く。

「逃げろ」「死ぬぞ」「動け」と頭の中でそう考えてしまうが、僕の選んだ選択は「逃げる

「事」ではなく「全身で受け止める事」だった。

「来い!!」

肩、肘、手首とウダイオスの核関節が煌々しく発光し禍々しい紫の光輝と共にウダイオスの右腕は霞んだ。

その瞬間、凄まじい爆風と衝撃波が襲い掛かって来るのに対して僕は全力で魔法で全身と剣に纏わせ防御態勢に入る。

それに巻き込まれたその場にいたスパルトイは一瞬の間も無く消滅する。

この一撃はウダイオスの本当の切り札と言えるものである事を身をもって実感した僕の身体は傷だらけとなっていたが、ミアハ様から貰った回復薬^{ポーション}を飲み干し傷を癒そうと思ったが魔法効果を思い出し服用を止める。

「あの一撃に耐えた…、僕はまだまだ強くなれる!!」

そう言いながら剣を構え、殆ど剥がれた炎雷を纏い直し疾^は駆^り出す。

走り出した僕を見てウダイオスは再び右腕を振り被るが、もう振り下ろされる事は無い。

何故なら、僕が肘の核関節を両断したからだ。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!」

なにが起ったのか分からないと言った感じで悲鳴を上げるウダイオス。

しかし、僕の攻撃はまだ終わってはいない。

「これで終わりだ」

そう言っつてウダイオスの首の骨を右横薙ぎに斬り払うと、首が落ちると同時に轟音と振動が発生しウダイオスは灰にへと変わるのだった。

そして、残されたのは階層主の魔石と怪物素材であるウダイオスの黒剣である。

「とりあえずはまづまづかな」

僕はそう言いながら回復薬を飲み干した後、ウダイオスの魔石を少しだけ残して後は全て喰らいとてつもない力の上昇を感じ取った。

「流石は階層主と言った所かな、他のモンスターの魔石とは力の上昇の仕方が段違いだ」
そう言いながら体の状態把握をした後、ウダイオスの黒剣を背負い更に下層にへと足を運ぶのだった。

遠征終了

ウダイオスを討伐した後、僕は更に深層を進んで行き五十階層まで到達したことで遠征が達成されるのだった。

「これで遠征終了か…、意外と簡単だったな」

そんな事を口にしながら僕は魔石と怪物素材ドロップアイテムを収集しながら地上にへと戻って行くのだった。

地上に着くとまず遠征終了の旨をエイナさんにへと伝えに行く。

「エイナさん」

「あつ、ベルくん遠征の準備なんだけど…」

「終わりました」

「へ？」

「だから、遠征を終えて帰って来たって言うてるんです」

「ええ~~~~~~~~っ!？」

僕の遠征達成の報告を聞いてエイナさんは驚いて大声を上げる。

「後、これウダイオスからドロップした希少怪物素材レア・ドロップアイテムです」

「ウダイオス…？三十七階層の階層主…、まだ次産間隔インタールがあるのになんで…？」

頭の自己処理能力が低下しているエイナさんは完全に機能停止シヨトしていた。

なので、僕は魔石と黒剣を除く怪物素材ドロツプアイテム全てを換金し9990万ヴァリスを手に入れて帰宅するのだった。

あの後、エイナさんが正気に戻り僕は黒剣の入手経緯を問い詰められるのは言うまでの事は無い。

エイナさんから解放されると、僕はまっすぐにヘステイア様の待つ本拠帰ホクムって行くのだった。

「おかえり、ベル君!!」

「はい、ただいま帰りましたヘステイア様」

互いに帰って来た時の挨拶をし、「ステイタス」の更新をする事にした。

「それにしても、遠征って言うのはそんなすぐに終わる物なのかい？」

「いえ、単純に僕一人だったから出来たと言えますね。他の人達もいればこんなすぐには不可能です」

「なるほど…、だからこそ無茶をして欲しくないなあ…」

「すみません、それだけは了承する事は出来ません。冒険者ですから」

「うん、それは解っているよ。これはボクの我が儘だつて事は」

「……」

「それでも、下界に来て初めて出来た眷族だからいつまでも一緒にいたいんだ」

「…ヘステイア様」

僕はヘステイア様の言ってくれた言葉を噛み締めながらこう言うのだった。

「ヘステイア様、僕も同じ気持ちです。だから、信じて下さい。僕は決してあなたを一人にはしない」

「ベル君…」

そうやって話しながら「ステイタス」の更新は進んで行き終わりを迎える。

「はい、更新が終わったよベル君」

「ありがとうございます、ヘステイア様」

更新が終わり、僕は上着を着てから自分の「ステイタス」を確認するのだった。

ベル・クラネル

L v. 7

力SSSS2134↓5960 耐久SSS1718↓4611 器用SSS209

9↓4569 敏捷SSSS2590↓5643 魔力I0↓SSS3556

幸運EX 怪人EX

【人怪融合】
モンスターム・ユニオン
ハイブリッド

・異種混成
ネオイレギュラー

・超越界律
ステイタス・バグ

・神理崩壊
アニメ・イローション

・穢靈侵食
オーバード

【超越怪人】

・無限再生
アベイロン・リバー

・無限成長
アベイロン・アウクセス

・限界突破
クリティカルオーバー

【捕食者】
ブレデター

・完全回復
フルリカバリー

・怪物喰い
モンスター・イーター

【才禍の怪物】
モンスターム・タレント

・超早熟する
りかい

・怪物が続く限り効果持続
りかい

・怪物の丈により効果向上
りかい

【怪物恩寵】
モンスターム・アムフロシア

- ・強喰増幅オーバーイート
- ・無限暴喰ベルゼブル
- ・尽喰貪王タイラント
- ・完全擬態アソルト・コピー
- ・成長増強ビルドアップ

〔グラトニー・サーベラス〕

- ・付与魔法エンチャント
- ・炎属性・雷属性マジックドレイン
- ・魔力吸収ダメージドレイン
- ・損傷吸収エナジードレイン
- ・生命吸収カースドレイン
- ・呪詛吸収

・詠唱式『幾ら喰らえどもこの器みから溢れ零れでる飢餓うえは満たされぬ』『美食買でも悪食量でも満たされぬ』『既にこの身は穢しされ侵食おされ禊すも浄化くも救恤すいすら皆な無く罪過なの烙印をを刻み込む』『飢餓うえの象徴しょうたる涎ぜんは大地つちを侵し、大海うみを穢しし、大空そらを閉とざす』『食物をを喰らい、怪物をを喰らい、精霊をを喰らい、他者をを喰らい、恩恵をを喰らい、呪詛のろいを喰らい、病魔やまいを喰らい、意思をを喰らい、誇りをを喰らい、魂魄たましいを喰らい、我が身をすらも喰らう底無し穴

の幽鬼』『森羅万象全て喰らい貪り味わい飲み込み己が血肉と化す』『たとえこの身の魂が無間の地獄に墮ちようとも喰らい続ける』『この身はいずれ神々をも喰らおう』『蹂躪し数多を飲み干し平らげる 暴喰の霸道ここに極まれり』『暴悪に喰らい尽くす原罪の一角たる暴喰の化身が胎動する』

【アウレー・エウアンゲリオン】

・回復魔法

・詠唱式『奏でられるは堅琴の音色』『その音色は優しき魂の平穩へと導く静寂の園へと通ずる』『静寂の園で響き渡るは聖鐘楼の福音』『静寂しずかなる悠久の時間ひとときはゆつくりと流れる』

「うん、規格外だね」

ヘステイア様は僕の「ステイタス」にそう感想を述べるけど、僕としてはこれが通常ふつうなためヘステイア様に同意できないのだった。

震撼

迷宮都市・オラリオに激震が走る。

その理由は深層の迷宮の孤王であるウダイオスの単独討伐達成と希少怪物素材の発生である。

そして、もう一つオラリオを騒がせていることがある。

それは階層主単独討伐を達成したのが零細派閥の冒険者だということ

その冒険者が二大最強派閥〔フレイヤ・ファミリア〕首領・オツタルと同じLv. 7であること

その冒険者は都市外からオラリオにやって来たばかりの十四歳の少年であること
これが今オラリオを騒がせているのだった。

その渦中の主は主神と共に〔ヘファイストス・ファミリア〕主神ヘファイストスの仕事場に訪れていた。

いや、正確にはある人物が原因でここに来ている。

「本当にごめんなさいね、ヘステイア。椿が貴方達の所へ押し掛けていたなんて……」

ヘファイストス様の口から出た椿と言う名の女性は椿・コルブランドと言い「ヘファ

まいか」

「ああ、構わない」

椿の言葉に対して即答で了承し、持ってきていたウダイオスの黒剣を手渡した。

「鍛えるにあたって武器の要望はなにかあるか？」

「長剣とは違う武器が良いな、手数が多いのとより頑丈なものが良い」

「手数で言うのであれば双剣だな、より頑丈なものとなると…最硬精製金属オリハルコンと統合させて不壊属性デコランダルを付与するか」

「ああ、それで頼む」

「よし、任された!!それでは主神様、手前は制作に入る故これにて御免!!」

そう言うって椿は部屋を飛び出し、己が工房にへと走って行くのだった。

「全く嵐の様だったね」

「はあ…、あの子にも困ったものね…」

「鍛冶師としても魅力的な素材だったって事ですよ」

その後も世間話を続いたのだった。

暗躍

オラリオがベルの前人未踏の偉業を達成した事に人々が興奮冷めやらぬ中、イウイルス闇派閥の幹部であるヴァレッタはいらだちを隠せずにした。

「クソツタレがあつ!!よりにもよつてL.V. 7だど!?あんなクソガキがあああああああああああつ!!!」

怒りのままに叫び散らかすヴァレッタに対して白衣の集団は何も言わない。

言つたところで返ってくるのは言葉

、剣による一閃であることを知っているからだ。

しかし、そんな中で一人の男神がヴァレッタに話しかける。

「まあ、そんなに喚いたつて現状は良くならないよヴァレッタちゃん」

「・・・タナトス」

男神の名はタナトス、死そのものを司る神でありイウイルス闇派閥「タナトス・ファミリア」の主神である。

「それに、あれだけ目立たれちゃつたらこつちも迂闊には動けないよね。しかも、ダンジョンで襲おうにも格上過ぎて話にもならない」

「何が言いてえ？さっさと言えよ」

まどろっこしいと言わんばかりのヴァレッタの視線と声にタナトスはこう言い放つた。

「神殺しの怪物に相手をさせようよと思つてき・・・、七年前と同じようにね・・・!!」
『!?!』

目を血走らせながらそう宣言してくる主神タナトスに対してほぼ全員が絶句するながらヴァレッタのみが口角をつり上げながら嗤つてみせる。

「それ、良いなア・・・!!」

「決まりだね、作戦決行日は一週間後ということだ」

闇に着実に牙を研ぎ、ゆっくりと迫ってくるのだった。

「ヘアアイストス・ファミリア」の帰り道、ヘステイア様をバイト先のじゃが丸くんの屋台に送り届けた後、僕は何か背中に冷たいモノを感じ取つて後ろを振り返ると、そこには変わりの無い街の喧騒が広がっていた。

「気のせいかな?」

なにやら違和感を拭い切れていない部分があるが、気にしない事にした。

そして、一週間が過ぎた頃に椿から注文の品が出来たと連絡を受けた僕はすぐにダンジョンに潜る準備を整えて椿の工房へ足を運ぶのだった。

「おつ、来たなベル」

「完成したって聞いていても経つてもいらなかったからな、すぐ来た」

「はっはっはっはっは、そう言ってもらえるのであれば鍛冶師冥利に尽きるというものよ」

互いにそう言うと、早速本題に入ることにした。

「これが《ウダイオスの黒剣》で鍛え上げた双剣だ」

「おお!!」

椿の指差す方向を視線を向ければ、そこには漆黒の剣身を持つ二本の長大な両刃剣だった。

「随分大きいな」

「うむ、元々の素材の大きさもあつたが故に双剣でありながら長剣のようになってしまった。更に言えば刀身の方もだんぴらになってしまつて重量もそこそこある」

「ふむ」

椿の説明を受けながら僕は双剣の一振りを手を取った。

すると、ズシリと確かに重みを感じたが扱いにくさは無かった。

むしろ、逆に軽ければすっぽ抜けてしまうと覚えてしまう。

「いや、これでいい。こっちの方が手に馴染む」

「そうか、それであれば良いのだが・・・」

椿はそう言うのと、更に言葉を続けてくる。

「そして、注文通りその双剣は最硬精製金属オリハルコンを使用して不壊属性デユランダルを付与させてあるぞ」

「ああ、助かる」

「それでだな、ベルその双剣は精製金属ミスリルも混合させてあるのだ」

「何故だ？」

「手前の鍛冶師としての直感だな、だからそうするべきだと手前は判断し、精製金属ミスリルを混ぜた。勝手な事だとは重々承知だ。料金の無料タダでいい、向こう五年の整備費も無料タダだ」

そう言うってくる椿の目は真剣そのものだった。

「いや、金は払う。お前の直感を信じる」

僕はそう言いながら懐からヴァリスの入った麻袋を椿へと渡した。

「そう言うって貰えるのなら手前も鍛冶師冥利に尽きるといふものだ」

椿は麻袋を受け取りながらそう言うってくる。

そうして、初めての特注オーダーメイドの武装を手に入れた僕だった。

「お前ら、良いな。旨そうだ。」

そう言いながら双剣を抜剣し、魔法を唱える。

『幾ら喰らえどもこの器から溢れ零れでる飢餓は満たされぬ』『美食でも悪食でも満たされぬ』『既にこの身は穢され侵食され禊も浄化も救恤いすら皆無く罪過の烙印を刻み込む』『飢餓の象徴たる涎は大地を侵し、大海を穢し、大空を閉ざす』『食物を喰らい、怪物を喰らい、精霊を喰らい、他者を喰らい、恩恵を喰らい、呪詛を喰らい、病魔を喰らい、意思を喰らい、誇りを喰らい、魂魄を喰らい、我が身すらも喰らう底無し穴の幽鬼』『森羅万象全て喰らい貪り味わい飲み込み己が血肉と化す』『たとえこの身の魂が無間の地獄に堕ちようと喰らい続ける』『この身はいずれ神々をも喰らおう』『蹂躪し数多を飲み干し平らげる 暴喰の霸道ここに極まれり』『暴悪に喰らい尽くす原罪の一角たる暴喰の化身が胎動する』

【グラトニー・サーベラス】

燃え盛る赫焔と激しく迸る金雷を全身と双剣に纏い、激突するのだった。

地上

ギルドではこの異常事態の対処に追われていた。

「おい、ダンジョンで異常事態の詳細を冒険者から聞き込んでこい」

「は、はいいいいっ!!」

班長の言葉にミイシヤが走って行く。

「各派閥の冒険者を招集し、モンスター^{ファミリア}の地上進出を食い止ませろ!!」「それから「フレイヤ・ファミリア」【ロキ・ファミリア】の第一級冒険者には異常事態の原因の対処させろ!強制任務として発令しろ!!」

「は、はい!!」

ギルド長の言葉に指示にローズさんが走る。

「おい、チュールお前の担当している「ヘスティア・ファミリア」のLv. 7であるベル・クラネルモンスター進出を食い止めさせろ!!」

「はい!!」

ギルド長の指示を聞き、「ヘスティア・ファミリア」の本拠^{ホーム}にへと向かうのだった。

その途中、最上級鍛冶師^{マスター・スミス}の椿・コルブランド氏とぶつかってしまった。

「何やら騒がしいが・・・、もしや異常事態か^{イレギュラー}」

冒険者達の様子から察してくれた椿氏にも今起こっている事態を伝えると衝撃の事実を知る。

「確か、今ベルが手前の鍛えた双剣を試すためにダンジョンに向かったはずだが・・・」

「え？」

その言葉に私は我が耳を疑ったが、その言葉を反芻する内にそれが現実だと言うことを自覚する。

ダンジョンの方へと顔を向けて願った。

「ベル君、どうか無事でいて」と。

死闘

三十階層では二体の未知のモンスターと僕が静かに睨み合う。

そして、最初に我慢の限界が来たのは三つ首の巨獣だった。

左前足を振り上げ押し潰そうと振り下ろしてくる。

それが戦いの合図となり、僕は迫ってくる左前足を一刀両断し巨獣の機動力を奪う。

「グギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!」

この一撃で終わると思っていた巨獣は思わぬ反撃に悲鳴を上げる。

それとはお構いなしに肉食恐竜が尻尾を横薙ぎに振るってくるのを後ろに跳び躲した。

すると、痛みに慣れた巨獣の額の赤い珠が輝く。

それを見た僕は背筋が寒くなる感覚に襲われた。

その瞬間、巨獣の真ん中の口が開くと炎が吐き出されてくる。

それに対して僕はその炎の中に飛び込んだ。

それには理由がある、それは二つ。

グラトニー・サーベラス
この魔法の四つある特性の一つである【ダメージ・ドレイン損傷吸収】は傷を負えば負う程に強くなる、

「チイイッ!!」

更に背後から肉食恐竜が大口を開いて襲いかかってくる。
更に巨獣の左右の首の額にある宝玉が同時に輝きを放つ。

それに対して僕に焦りは無かった。

何故なら、便利な肉壁があるから。

そうして、僕は体制を低くして肉食恐竜の懐に飛び込んだ。

目標を見失った肉食恐竜はそのままの勢いで巨獣に突っ込んでしまおうと共に左右の首から放たれた風と雷の攻撃をまともに食らってしまおう。

巨獣の方も肉食恐竜の牙が自分に食い込み悲鳴を上げる。

『グルウアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!』

『グギユリユリアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!』

更に肉食恐竜の牙が深く食い込んでいるのか中々離れることが出来ないようだ。

攻撃を受けた肉食恐竜の肉体は風で切り刻まれ、雷によって焦げた匂いが鼻につく。

「臭い」

そう言いながらも現状を好機とみて仕掛けようとした時、肉食恐竜の黒い鱗が輝き始める。

それを見ると背筋が凍る感覚に襲われた瞬間、僕の身体は動き出していた。

しかし、それよりも早く鱗に蓄積されていた光が解き放たれた。「くそっ!!グハツ!!」

解き放たれた光は全方位に散弾のように放ち、僕も打ち落とそうと双剣を振るうが数が多すぎた。

散弾のように飛んでくる光が身体を焼いてくる。

「がああああ・・・」

身体に走る激痛に思わず膝を付きそうになるが、それだけは御免被る。

「これで・・・決めてやる・・・!!」

そう言いながら二体のモンスターを睨み付け走り出した。

「一気に片付けるには喰らうのみ」

ぼそつと呟いた僕は肉食恐竜と巨獣の肉を喰い千切り飲み込んだ。

その瞬間、「ステイタス」が激上する感覚を感じながら二体を軽く飛び越えた高さまで跳んだ。

そして、僕は双剣に炎雷を纏わせて振るう。

炎雷魔法を纏った双剣は巨獣と肉食恐竜を斬り捨てた。

その瞬間、二体のモンスターから魔石と怪物素材ドロップアイテムが排出されたのだった。

「ハア・・・ハア・・・ハア・・・」

息絶え絶えになりながらもゆっくりと魔石の前に立った。

そして、二体のモンスターの魔石を完食し「ステイタス」が上昇するのを感じた。

そして、怪物素材である巨獣^黒の素材と肉食恐竜^黒の素材を背囊に回収し地上に戻るの

だった。

新たな頂天の誕生

二体のモンスターを討伐した僕は正規順路ルートが外れて少し離れた小広間ショート・ルームで休息を取っていた。

「流石に身体が重いな・・・」

そう言いながら「ミアハ・ファミリア」製の回復薬ポーションを全て飲み干すも傷は少ししか消えずに残っている。

「使うか」

そう呟いた後、僕は詠唱うたう。

『奏でられるは堅琴の音色』『その音色は優しき魂の平穩へと導く静寂の園へと通ずる』
『静寂の園で響き渡るは聖鐘楼の福音』『静寂しずかなる悠久ひびきの時間はゆつくりと流れる』

【アウレー・エウアンゲリオン】

魔法名を言い終えると、白い聖鐘楼が現れると大きくも心安らかになる音色を奏でると先ほどまでであった傷が綺麗さっぱり消え去っている上に体力までもが回復している。

「これで地上に帰れる」

そう言って僕は地上を目指すのだった。

そうして、僕が地上に戻ってくると多くの冒険者が摩天楼施設に集まっている。

「さて、換金しに行こう」

そう言つて素通りをしギルドに向かうのだった。

ギルドに着くと、職員全てが慌ただしく動き回っている。

「あつ、ベル君!!」

エイナさんが僕を見て声を上げると他の職員達もこちらを見てくる。

「心配してたんだよ、ダンジョンで神の送還が行われたつて聞いてモンスター達が地上進出してこようとしてたから……。そうだ、ベル君神の送還が切っ掛けでダンジョンの中で何があつたか教えてくれないかな?」

息継ぎ無しに怒濤の言葉責めをしてくるエイナさんに対して僕はこう言った。

「黒いモンスターが二体居たな」

それを言つた瞬間、ギルド内は更にざわめきを強める。

すると、エイナさんの後ろから一人の妖精エルフがやってくる。

「今の話、詳しく聞かせてはくれないか」

「誰だ」

「私は【ロキ・ファミリア】副団長のリヴェリア・リヨス・アールヴだ」

「僕は【ヘステイア・ファミリア】のベル・クラネルだ」

あの後、エイナさんに応接室へと通され互いに自己紹介をした後、僕は戦った二体のモンスターのことを話す。

そして、黒いモンスターが神々を殺すために生み出された神殺しのモンスターであることを知る。

「三つ首の巨獣けものに黒い鱗を纏った肉食恐竜か・・・」

そう言いながら顎に手を当てて考え込む仕草をする。

そこで僕はこう言った。

「対策を講じようとしているならその必要はない」

「どういう意味だ？」

「既に討伐済みだ」

「何だっ!?!」

僕の言葉にリヴェリアは声を荒げる。

「ダンジョン内にいた僕はこの異常事態ホトを喰らう為に」

「!?! 何故、そんな無茶をした!! 下手をすれば死んでいたかもしれんのだぞ!!」

そう言ってくる王族妖精リヴェリアに僕はこう言った。

「死すればそこまでだったただけの話だ。ただそれだけだ」

「!?!」

僕の言葉にリヴェリアは言葉を発することが出来なかった。
「それじゃあ僕は帰る」

そう言つて僕はギルドを応接室を出るのだった。

私、リヴェリア・リヨス・アールヴは先ほどまで話していたベル・クラネルとの会話を思い出していた。

『死すればそこまでだっただけの話だ。ただそれだけだ』

「まるでゼウスとヘラの眷族ではないか」

そう言いながら私は背もたれにもたれ掛かる。

しかし、いつまでもこうしては居られない。

そうして、私はエイナに一言言つてから黄昏の館に戻るのだった。

換金を終えて本拠から帰つた僕は長椅子に座り、二体のモンスターから出た怪物素材を取り出した。

まずは三つ首の巨獣の怪物素材である黒宝玉。

理由は分からないけど、怪人としての僕が“喰らえ”と訴えかけている。

僕はその意志に従つて黒宝玉を丸呑みすると、内側から力を馴染んで来るような感覚

があつた。

それは戦闘時にモンスターを喰らった感覚とは違ってジワジワと染みこんでいくようなそんな感覚だつた。

そして、二つ目の怪物素材である肉食恐竜の黒巨鱗は僕のことを覆えるほどの大きさがあるため、防具プロテクターに利用することにした。

そう考えを纏めていると、ヘステイア様が帰ってくる。

「ただいま、今帰ったよベル君!!」

「お帰りなさい、ヘステイア様」

そうして、僕達は夕食を食べ入浴を済ませると「ステイタス」の更新を行う。

「それにしても、今日は大変だったんじゃないかい」

「何がですか?」

ヘステイア様の言葉に僕が疑問符を浮かべるところこう言ってくる。

「だって、今日はダンジョンで神の送還があつて異常事態イレギュラーが発生したそうじゃないか」

「そうでしたね、どうでも良かったので忘れていました」

「おいおい、それは冒険者としてはダメじゃないか」

「そうですね、以後気をつけます」

「もお・・・、ほぎやあつ!」

「そうやって話している内に〔ステイタス〕の更新が終わると同時にヘステイア様が奇声を上げる。」

「どうかしましたか、ヘステイア様？」

ランクアップ
「器の昇華出来る・・・」

「そうですか、それじゃお願いします」

「いやいや、少しは驚こうよ!!」

「いえ、神殺しのモンスターを二体同時に相手にして単独討伐したのでこのくらいは妥当ではないですかね？」

「なにそれコワイ」

ランクアップ
「器の昇華に対する反応が薄い僕に対してヘステイア様がそう言うのをその要因になった出来事を口にする」とドン引きしていた。

「その後、神殺しの魔石を完食したんでそれも理由になるでしょうか」

「ベル君の規格外さにボクは着いていけないよ」

黄昏れた空気を放つヘステイア様に僕はこう言った。

「まあ、僕の場合は存在自体が異常ですし・・・」

「それはそれとして、これが君のLv. 7としての最終的な〔ステイタス〕だ」

そう言ってヘステイア様が〔ステイタス〕を書き写した羊皮紙を見せてくる。

ベル・クラネル

L v. 7

力SSSS5960↓8960 耐久SSS4611↓7629 器用SSS456

9↓7925 敏捷SSSS5643↓9669 魔力SSS3556↓7269

幸運EX 怪人EX

【人融合】

モンスターム・ユニオン

ハイブリッド

異種混成

ネオイレギュラー

超越界律

ステイタス・バグ

神理崩壊

アニマ・イロージョン

穢靈侵食

【超越怪人】

オーバーロード

アペイロン・リバー

無限再生

アペイロン・アウクセシス

無限成長

クリティカルオーバー

限界突破

【捕食者】

プレデター

フルリカバリ

完全回復

モンスター・イーター

怪物喰い

【才禍の怪物】
モンスターム・タレント

- ・超早熟する
りかい
- ・怪物が長く限り効果持続
りかい
- ・怪物の丈により効果向上

【怪物恩寵】
モンスターム・アムフロンア

- ・強喰増幅
オバーイー
- ・無限暴喰
ベルゼブル
- ・尽喰貪王
タイラント
- ・完全擬態
アブソルート・コピー
- ・成長増強
ビルドアップ

【グラトニー・サーベラス】

- ・付与魔法
エンチャント
- ・炎属性・雷属性
- ・魔力吸収
マジックドレイン
- ・損傷吸収
ダメージドレイン
- ・生命吸収
エナジードレイン
- ・呪詛吸収
カーズドレイン

・詠唱式『幾ら喰らえどもこの器から溢れ零れでる飢餓は満たされぬ』『美食でも悪食でも満たされぬ』『既にこの身は穢され侵食され禊も浄化も救恤いすら皆無く罪過の烙印を刻み込む』『飢餓の象徴たる涎は大地を侵し、大海を穢し、大空を閉ざす』『食物を喰らい、怪物を喰らい、精霊を喰らい、他者を喰らい、恩恵を喰らい、呪詛を喰らい、病魔を喰らい、意思を喰らい、誇りを喰らい、魂魄を喰らい、我が身すらも喰らう底無し穴の幽鬼』『森羅万象全て喰らい貪り味わい飲み込み己が血肉と化す』『たとえこの身この魂が無間の地獄に墮ちようとも喰らい続ける』『この身ははずれ神々をも喰らおう』『蹂躪し数多を飲み干し平らげる 暴喰の霸道ここに極まれり』『暴悪に喰らい尽くす原罪の一角たる暴喰の化身が胎動する』

【アウレー・エウアンゲリオン】

・回復魔法

・詠唱式『奏でられるは堅琴の音色』『その音色は優しき魂の平穩へと導く静寂の園へと通ずる』『静寂の園で響き渡るは聖鐘楼の福音』『静寂なる悠久の時間はゆつくりと流れる』

これが僕のL.V. 7の最終【ステイタス】か。

「それじゃあ、ヘステイア様お願いします」

「解ったよ」

僕の言葉の後、ヘステイア様によって「ステイタス」が昇華される。

ベル・クラネル

L V . 8

力 I O 耐久 I O 器用 I O 敏捷 I O 魔力 I O

幸運 E X 怪人 E X

【人怪融合】

モンスターム・ユニオン
ハイブリッド

異種混成
ネオイレギュラー

超越界律
ステイタス・バグ

神理崩壊
アニマ・イロージョン

【超越怪人】

オーバード
アペイロン・リパース

無限再生
アペイロン・アウクセシス

無限成長
クリティカルオーバ

【捕食者】

ブレデター
フルリカバリ

完全回復

・怪物喰い
モンスター・イーター

【才禍の怪物】
モンスターム・タレント

・超早熟する

・怪物りかいが続く限り効果持続

・怪物の丈により効果向上

【怪物恩寵】
モンスターム・アムフロシア

・強喰増幅
オーバレイアウト

・無限暴喰
ベルゼブル

・尽喰貪王
タイラント

・完全擬態
アフソルト・コピー

・成長増強
ビルドアップ

【グラトニー・サーベラス】

・付与魔法
エンチャント

・炎属性・雷属性

・魔力吸収
マジックドレイン

・損傷吸収
ダメージドレイン

・生命吸収
エナジードレイン

・カースドレイン
・呪詛吸収

・詠唱式 『幾ら喰らえどもこの器みから溢れ零れでる飢餓うえは満たされぬ』 『美食質でも悪食量でも満たされぬ』 『既にこの身は穢おされ侵食おされ禿すも浄化すも救恤すいすら皆な無く罪過なの烙印れを刻み込む』 『飢餓うえの象徴しょうたる涎げんは大地つちを侵し、大海うみを穢すし、大空そらを閉そざす』 『食物を喰らい、怪物を喰らい、精霊を喰らい、他者を喰らい、恩恵を喰らい、呪詛のろいを喰らい、病魔やまいを喰らい、意思を喰らい、誇りを喰らい、魂魄たまひを喰らい、我が身すらも喰らう底無し穴の幽鬼』 『森羅万象全て喰らい貪り味わい飲み込み己が血肉と化す』 『たとえこの身この魂たまが無間の地獄に堕ちようとも喰らい続ける』 『この身はいずれ神々をも喰らおう』 『蹂躪しゆりし数多を飲み干し平らげる 暴喰の霸道こここに極まれり』 『暴悪に喰らい尽くす原罪の一角たる暴喰の化身けものが胎動する』

【アウレー・エウアンゲリオン】

・回復魔法

・詠唱式 『奏でられるは堅琴の音色』 『その音色は優しき魂の平穩へと導く静寂の園へと通ずる』 『静寂の園で響き渡るは聖鐘楼の福音』 『静寂しずかなる悠久ひとときの時間ひとときはゆつくりと流れる』

こうして、オラリオに新たなLv. 8の冒険者が誕生した。

騒動

「Lv. 8に昇華した翌日、僕はギルドにやってきた。」

「ベル君、今日はどうしたの？」

「エイナさんが目的を聞いてくるのに対して僕はこう言った。」

「器ランクアップの昇華をしたのでその報告です」

「ラ、ララ、ランクアップ~~~~~!!?」

僕の言葉を受けてエイナさんは普段は出さない大声でそう言った。

その結果、ギルドにいた冒険者、ギルド職員の視線が僕達に集中してくる。

「ゴ、ゴめん、ベル君!!個室に来てくれるかな!!」

周囲の視線に気付いたのかエイナさんは慌てながらそう言ってくる。

僕はそんなエイナさんに付いていき個室にて話し合いを始める。

「そ、それじゃベル君器ランクアップの昇華のことについて聞かせて貰えるかな」

そう言ってくるエイナさんの質問に一言一句はつきりと伝えた。

「ダンジョンで生まれた神殺しのモンスターを単独討伐……しかも二体だなんて……」

そう言いながら話を受け止め切れていないエイナさんに対して僕はこう言った。

「エイナさん、こういうのは割り切った方が楽ですよ。精神的に」

「少なくとも、君が言う言葉ではないと思うよ」

僕の言葉に辛辣に言葉を返してくるエイナさん。

「それじゃあ、報告はしたんで僕は帰ります」

「うん、解ったよ。でも、こういう突拍子もない事は控えてね・・・」

「保証は出来ません」

そう言つて僕はギルドから帰宅するのだった。

ギルドから帰つてくると、武器と例の怪物素材内食念庵の黒巨鱗を持つて椿の工房に足を運ぶのだつた。

「椿」

「おお、ベルではないか。どうした、装備の手入れにでも来たのか？」

工房に入ると、作業に取りかかろうとしていた椿がいた。

「ああ、それもあるが防具を作つて欲しくてな」

「ふむ、それはまた急ではないか。何かあったのか？」

「お前も知つての通り、神の送還で生まれた二体の神殺しのモンスターを」

「お主が倒したのだろう、それがどうかしたのか？」

「その二体の内一体のモンスターが怪物素材ドロップアイテムを出した」

「ほう、それで？」

僕の言葉を聞いた納得したような顔で聞いてくる。

「それを用いた防具を造ってくれ」

「あいわかった、任せよ」

一二つ返事で了承してくる椿に感謝しながら僕は肉食恐竜の黒巨鱗を手渡した。

「おお〜〜つ、これが神殺しのモンスタードロップアイテムの怪物素材か〜〜つ!!」

そう言いながら椿はまるで童のように目をキラキラさせている。

「それで防具に何か希望はあるか？」

「出来れば全身鎧フルプレートが良いんだが、軽装鎧ライトアーマーでも構わない」

「承知した、出来る限り要望には応えよう」

「ああ」

椿の言葉に同意すると、白銀の双剣を渡してくる。

「これは・・・？」

「お主に半端な武器は渡せんからな、すぐに使い潰してしまおうからな。不壊属性デューランダル

の双剣を代剣を出しておく」

「助かる」

そうして、防具の依頼をして椿の工房を去るのだった。

【ロキ・ファミア】

無名の第一級冒険者ベル・クラネル、Lv. 8へ到達!!

「さて、彼は何者なんだろうね・・・」

そう口にするのは「ロキ・ファミア】団長にして勇者の二つ名を持つ第一級冒険者
フィン・ディムナ。種族は小人族バルウム

「リヴェリア、其奴に会ったのだろう。どんな若造だった？」

フィンの次に口を開いたのは「ロキ・ファミア】最古参にして豪傑エルガラムの二つ名を持つ
第一級冒険者ガレス・ランドロック。種族は鉱人ドワーフ

「ああ、あの少年に感じたモノはかつての最強と最恐ゼウスとヘラだったよ」

三番目に口を開いたのはベルと開講を果たしている一人、「ロキ・ファミア】副団長
にして都市最強の魔導師の呼び声の高い九魔姫ナイン・ヘルの二つ名を持つ第一級冒険者リヴェリ
ア・リヨス・アールヴ。種族は王族妖精ハイエルフ

「でも、ダンジョンに入らずにどうやってLv. 7まで至ったのかしら？」

「そうだよ、あたし達だつて中々Lv. 6になれないのね・・・」

疑問を口にしたのは「ロキ・ファミア】幹部にして怒蛇ヨルムガンドの二つ名を持つ
第一級冒険者ティオネ・ヒリュテ。種族は女戦士アマゾネス

そして、その疑問に同意するのは「ロキ・ファミア」幹部にして大切断の二つ名を持つ第一級冒険者ティオナ・ヒリユテ。種族は女戦士^{アマゾネス}

「チツ」

舌打ちするのは「ロキ・ファミア」幹部にして凶狼^{ヴァナルガンド}の二つ名を持つ第一級冒険者
ベート・ローガ。種族は狼^{ウエアウルフ}人

「……」

無言のままにベルのランクアップした記事を凝視するのは「ロキ・ファミア」幹部にして劍姫^{けんぎ}の二つ名を持つ第一級冒険者アイズ・ヴァレンシュタイン。種族は人間^{ヒューマン}

「んー、それにしてもドチビのところにそんな逸材がいくとはなあ……」

ヘスティアのことをドチビと呼ぶのは「ロキ・ファミア」主神であるロキ。

実はこのロキとヘスティアは天界時代から犬猿の仲である。

「そう言っついても仕方がないよ、ロキ。僕達は僕達のやり方でやっていくだけさ」

ロキの言葉にフィンがそう言うのと、ガレスがリヴェリアに問いかける。

「そういえばリヴェリアさつき言っていたゼウスとヘラを感じたとはどういう事じゃ？」

「ああ、それは彼から神殺しのモンスター二体の討伐を聞いたときに死んでしまつては意味がないと言つたのだが『死すればそこまでだっただけの話だ。ただそれだけだ』と

返されてしまった。」

「確かに連中であればそう言いそうじゃが・・・」

リヴェリアの言葉に同意するも疑問が残るガレスの様子にフィンが口を開く。

「そうだね、彼に関しては頭の片隅にでも留めておこう」

それに関してはその場にいる全員が一致するのだった。

暗転

L v . 8 になつた僕はダンジョンに来ていた。

理由は魂ランクアップの昇華に伴つて激化した「ステイタス」によつて起こつた感覚のズレを調整しに闘技場に訪れ、魔法無しで十時間以上も戦闘を行つた。

「ふう、やつと違和感がなくなつた」

そう呟く僕の足下には大量の魔石と怪物素材ドロップアイテムが転がっていて、壁は無数の亀裂が深々と刻まれている。

そして、代剣の双剣は長時間の戦闘によつて酷く摩耗していた。

「椿に文句を言われそうだな」

そう愚痴りながら僕は転がっている魔石と怪物素材ドロップアイテムを回収して地上に戻るのだった。

地上に戻ると魔石だけを換金し、怪物素材ドロップアイテムが椿への詫び賃として渡したのだった。

そして、手入れに出していた三本の武器で長剣の「バーゼ・マーレボルジエ」が先に手入れを終えて戻ってきた。

すると、椿がこんな事を聞いてくる。

「ベルよ、その剣は呪武器カース・ウェポンであろう。どこで手に入れた？」

「謎の白装束の覆面集団から奪った」

別に隠すことではないため、正直に伝えると苦虫を噛み潰したような顔でこう言ってくる。

「ベル、其奴らは恐らく闇派閥イウイリスと言う連中だ。面倒な連中だ、気をつけろ」

「ああ、解っている。それこそ嫌って程にな・・・」

そんな会話の後、僕はヘスティア様行きつけの古書店に足を向けた。

そして、ある一冊の本と出会うのだった。

まさか、この本がある出会いを引き合わせるのだった。

古書店に着くと、何か珍しい英雄譚が無いか探していると真つ白い本が目に入った。

「レコード・ファミリア？」

そう表紙に書かれた題名を口にし、本を開くとそこには何も書かれていなかった。

疑問に思った僕が初老の男性店主に話を聞くと分からないという答えしか返ってこなかった。

それでも、僕はこの本が気になってしまい購入するのだった。

そして、僕は本抛ホームに帰り本を取り出すと、さつきまで真つ白だった本が翡翠と金の本へと変わっていた。

「どういう事だ？」

疑問に思いながらも本を開いた瞬間、僕の意識はそこで失われるのだった。

そうして意識を失ってから目を覚ますと、さつきまでの活気あるオラリオとは思えないほど静かだった。

その事に疑問に思っていると、都市の中から爆音が響き渡り、悲鳴も轟いていた。

「これはどういう事・・・？」

あまりにも突然すぎる都市の変貌に僕は完全に混乱していた。

「なんだ、ここに雑音を奏でる者が居たか・・・」

後ろから聞こえてきた声に対して僕は長剣けんを抜き放ち、臨戦態勢を取る。

振り返ると、そこには目を閉じ黒い衣装ドレスに身を包んだ灰色の髪の女性だった。

悲しき邂逅

戦火に包まれるオラリオに目の前に居る謎の女性、僕の頭は理解が追い付いていない。

「小僧、お前のその顔いやその眼か……何故だか解らんが無性にくり抜きたくなくなる」

「!？」

女性の衝撃かつ過激な発言に対して強い警戒心を抱いた。

「小僧、貴様の名前は何だ？」

「……ベル・クラネル」

女性の急な質問に疑問を抱きながら僕は名前を名乗った。

「なんだと？ いや、まさかそんな……」

僕の名前を聞いた途端女性は驚きの表情を浮かべた後、眉間に皺を寄せ何やら呟きながら考え込み始める。

すると、女性の後ろから一本の大剣を携え黒い全身鎧フルプレートを纏う大男が現れる。

「アルフィア、何をしている？ エレボスが動いた、俺達も動くぞ」

「ザルド、あの子供を見てみる。『悪食』を極めたお前であれば見極めれるだろう」

アルフィアと呼ばれた女性は後からやってきたザルドと呼ばれる大男にそう言った。

「あの子供がなんだと………!!?」

ザルドと呼ばれる大男が僕のことを視界に捉えた瞬間驚いた表情をする。

「何故、あの子供からあのバカとメーテリアの『空気』と『状態』がするだと………

!?!」

ザルドと呼ばれる大男が言い放った言葉に理解が出来なかつた。

だが、アルフィアと呼ばれた女性はやはりそうかと納得した様子を見せていた。

「いや、待ておかしいぞ。何故、あの子供からモンスターの『空気』と『状態』がするん

だ!?!」

「!!?!」

心底驚いてしまった、あのザルドという大男は見ただけで僕の本質を見抜いたのだつた。

「………おい、ザルドそれは………どういう………意味だ………? 返答………次第………

では容赦はせんぞ」

ザルドと呼ばれる大男の言葉に対してアルフィアと呼ばれる女性の空気を一変させる。

しかし、声音は少し震えていたような気もする。

「残念だが言葉通りだ、アルフィア。あの子供にはあのバカとメーテリアの『空^{香り}気』と『状態^味』と共にモンスターの『空^{香り}気』と『状態^味』がするのは紛れもない事実だ……」

ザルドと呼ばれる大男の言葉を聞き終えたアルフィアと呼ばれる女性は僕の方へと振り向き、たった一言。

【福音^{ゴスペル}】

一言、たった一言。

その一言によって轟音と衝撃に襲われた。

謎の攻撃を受けた僕は吹き飛ばされ地面に叩き付けられた。

「グハッ!」

「メーテリアの子に、あの子の忘れ形見に何故モンスターが混ざっているのだ!?あの狒々爺の好々爺は何をしている!!」

激高するアルフィアと呼ばれる女性は誰かに怒りを向けていた。

「おい、小僧お前祖父はどうした?」

そう言ってくるアルフィアと呼ばれる女性に対して疑問に思いながらも答える。

「お爺ちゃんなら僕が14歳の誕生日の当日にモンスターに襲われて一緒に崖から転落死したと村長から聞いた。それがどうした?」

僕がそう言うと、アルフィアと呼ばれる女性はこう言ってくる。

「バカめ、あのエロジジイがその程度でくたばっているならとつくに天界に送還されている」

「天界に送還？」

何を言っているんだと思っていると、ザルドと呼ばれる大男もこう言ってくる。

「確かに、意外にもあの神は存外しぶとい」

「え？」

アルフィアとザルドと呼ばれる二人の言葉が衝撃的すぎて呆けた声が出てしまうと同時にザルドと呼ばれる大男の発した言葉を口にしていた。

「あの、お爺ちゃんが神ってどういう事ですか？」

「なんだ、あの好々爺から聞かされていなかったのか。お前の祖父は本当の祖父ではなく神のひとり一柱でゼウスと言う名前だ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

嘘だと思いたかった、お爺ちゃんが本当のお爺ちゃんじゃないなんて・・・。

でも、それは真実であると現実が突きつけてくる。

突如として知らされた己自身の出生の真実を受け止めることは出来なかった。

「それじゃあ、お爺ちゃん・・・神ゼウスのことを知っている貴女たちは一体誰なんです

か?」

「俺の名はザルド、元【ゼウス・ファミリア】所属の冒険者だった」

「私はアルフィア、元【ヘラ・ファミリア】に所属していた冒険者でお前の母親の実姉だ」

それを聞いて僕はゆっくりと身体を起こしながら問いかける。

「それじゃあ、僕の両親は……?」

「死んだ。父親の方は知らんが母親のメーテリアは先天性死病を患っていてその悪化によるものだ」

「そうですか……」

僕の両親はもうこの世界には居ない。

それを聞いてうつむいているとアルフィアさんがこう言ってくる。

「ベル、さっきお前は十四歳と言ったな」

「はい、そうです」

「私知知っている限りのベルの今の歳は七歳だったはずだ」

「え?」

「なに?それは本当か、アルフィア!?!」

アルフィアさんの言葉に僕とザルドさんが驚きの声を出す。

「つまり、この場にいるベルは今から七年後のベル・クラネルと言うことになるな」

「嘘・・・」

「なんとまあ・・・」

断言するアルフィアさんに僕は思考が追い付いていなかった。すると、アルフィアさんがこんな事を言ってくる。

「ベル、私のことはお義母さんと呼べ。お前の選択権は無い」

「・・・はい」

何故だろう、アルフィアお義母さんに逆らってはいけないというのを感じてしまう。

そんなことを思っていると、ザルドさんから同情の眼差しを向けられたのだった。

すると、アルフィアお義母さんがある質問をしてくる。

「ベル、何故お前にモンスターが混じっているのかを答えろ」

「はい」

アルフィアお義母さんの有無言わせぬ言葉に僕は一言一句偽りなく話した。

質問に答えるごとにアルフィアお義母さんの機嫌が悪くなっていくのが手に取るように解った。

「そうか、よく分かったよ」

「ああ、そうだなアルフィア」

「？」

僕には二人が何を言っているのか解らなかつた、次に発せられる言葉を聞くまでは……。

「やはり終わらせるしかないようだな、この『神時代』を」

「そして、『英雄の時代』へ逆行する！」

白兔の怒号

「何を言っているんですか・・・?」

僕は二人の言っていることが理解できない、一体どういう事なんだ?

「言葉通りの意味だ、ベル。私達はこの千年続く『神々の時代』を終わらせるんだ」

「アルフィアの言っていることは本当だ。俺達が犯した原罪を清算するためにこの凋落した英雄の都市を滅ぼす!!」

ザルドさんのその言葉でようやく理解出来た僕は大声で叫んだ。

「何を言っているんですか!?!オラリオを滅ぼすなんてどうしてそんなことをする必要があるんですか!?!」

その叫びに対してアルフィアお義母さんは言葉を返して来る。

「我々では果たせなかつた”三大冒険者依頼”最後の一体である”黒き終末”隻眼の黒竜討伐のためだ。そのために神々が降り立ち築いた『神時代』に幕を下ろし・・・”次代にして最後の英雄”を誕生させるために『古の時代』へと巻き戻す!!」

「たとえそれが千、万、億それ以上の命が散ることになるとしても成し遂げねばならん!!それがたとえ俺達が死ぬことになったとしてもだ!!」

「!!」

「二人の魂の叫びに対して僕はこう言った。

「いやだ」

「なんだ、何を言っているのか聞こえんぞ童」

「嫌だ」

「どうした、囁き程度の声では俺達には届かんぞ兎」

「嫌だ、そんなの絶対嫌だ!!せつかく家族と呼べる人達に出会えたのに!!その人達は僕に今生の別れを告げてくる!!認めない、そんなのは絶対に間違っている!!」

「ならばどうする!!」

「決まっている、貴方達を止める!!そして、”英雄”を求めるなら僕がなる!!いつか来る隻眼の黒竜も僕が喰らい尽くす!!」

「ならば止めてみせろ!!その身と命を賭してな!!」

「やってみせろ、クソガキがあつ!!俺達ですら果たすことの出来なかつた黒竜討伐^目を口にしたからには俺達を超えて見せろ!!お前の『弱者の咆哮』を聞かせて見せろお!!」「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おとおおお!!」

空気を震えさせる程の猛り声と共に幾度も斬り結ばれる剣戟によって起こる轟音と衝撃が都市を揺らし響き渡る。

「オツタルが戦っているのか・・・？」

「猛者・・・？」

誰もが現都市最強が戦っていると錯覚する。

それは小人族の勇者から正義の眷族までもがそうだった。

戦いの音に反応し動き出す冒険者達は本来決して出会うことが出来なかった筈の者同士の派閥騒動を目にすることになるのだった。

大剣と長剣での剣戟では本来であれば長剣が先に限界を迎えているにも拘わらずベールの振るう長剣「ベーゼ・マーレボルジエ」はザルドの振るう大剣の剛撃を受け止め、その刃をもって斬り掛かっていく。

それは何故かという「ベーゼ・マーレボルジエ」の制作者である闇派閥の呪術師であるバルカ・ペルデイクスの「神秘」の「アピリテイと剣

の素材に使われた最硬精製金属によって作り上げられた不壊属性を持つ呪剣なのである。

【福音】

「かはっ!？」

超単文詠唱とは思えない威力の魔法を僕はいちげき躲すことが出来ずにまともに食らってしまおう。

しかも、ザルドさんのことなどお構いなしに放ってくるからこそ躲し損ねてしまい魔法を喰らって地に伏してしまおう。

「いくらLv. 8とはいえ中身が『技と駆け引き』が未熟な冒険者では話にもならんし、取るに足らん童だ」

「ああ、俺達二人相手での様では黒き終末を討つ所か俺達を止めることすら不可能だ。諦めて大人しく寝ている兔」

二人の言葉に僕は立ち上がりながらこう言った。

「絶対に嫌だ!!ここで諦めたら”英雄”に憧れていた僕を根底から否定することになる……。だけど、それ以上に家族を失いたくないんだ!!だから僕は何度だって立ち上がる、絶対に二度も家族を失うのは嫌なんだ!!どうしても時代を逆行、巻き戻すというのなら最初としてまず最初に僕を殺していけよ!!」

「!？」

そう、僕が今も生きて立っているのは二人に殺す気がないからだ。

ザルドさんと剣を交え、アルフィアお義母さんの魔法を受けてなお生きているのはそ

のおかげだ。

僕を通してザルドさんは父を、アルフィアお義母さんは実妹である母を重ねてしまっている。

だからこそ、僕への止めの一撃を躊躇うだけの甘さを見せてしまっている。

「……………そうか、そうだったな。お前は仮にもあの狒々爺の好々爺に育てられていたのだったな。私もヤキが回っていたようだ、せつかく逢えた甥に己が甘さを指摘されるとはな……………さすがメーテリアの子だ」

「俺としてはあのバカの子供とはいえ見透かされてしまったことに衝撃を隠せないな……………だが……………子供とはいえ男があそこまで吼えて見せたんだ、ここで手を抜くというのは奴への侮辱に他ならんな」

そう言いながらザルドさんは大剣を構え、アルフィアお義母さんも臨戦態勢に入っている。

僕も魔法を使うために詠唱うたい始める。

『幾ら喰らえどもこの器みから溢れ出る飢餓うは満たされぬ』

【福音ゴスペル】

「さっせん!!」

アルフィアお義母さんが魔法で、ザルドさんが大剣の一撃にて詠唱の妨害をしてくる

けど僕は止まらない。

『美食でも悪食でも満たされぬ』『既にこの身は穢され侵食され禊も浄化も救恤いすら皆無く罪過の烙印を刻み込む』

L.V. 7の二人の猛攻を受けながらも血反吐を吐きながらも詠唱い続ける。

「ぐはっ!!」『・・・飢餓の象徴たる涎は大地を侵食し、大海を穢し、大空を閉ざす』『食物を喰らい、怪物を喰らい、精霊を喰らい、他者を喰らい、恩恵を喰らい、呪詛を喰らい、病魔を喰らい、意思を喰らい、誇りを喰らい、魂魄を喰らい、我が身すらも喰らう底無し穴の幽鬼』『森羅万象全て喰らい貪り味わい飲み込み己が血肉と化す』『たとえこの身この魂が無間の地獄に堕ちようとも喰らい続ける』『この身はいずれ神々をも喰らおう』『蹂躪し数多を飲み干し平らげる 暴喰の霸道ここに極まれり』『暴悪に喰らい尽くす原罪の一角たる暴喰の化身が胎動する』

【グラトニー・サーベラス】

最後の一文を詠唱い終え魔法名を言った瞬間、燃え盛り滾る赫焔と激しく迸る金雷が場所を示すかのように天へ立ち昇ると共に僕の身体と長剣へと纏う。

「ベル、その付与魔法がお前の魔法か？」

「そうです、そして貴方達二人を止める魔法だ!!」

「言うではないか、ならばやってみろ!!」

【福音】
ゴスベル

そう話した後、アルフィアお義母さんが魔法を放ってくるも僕には届かなかつた。

「!? どういう事だ!?!」

「アルフィア、どうやらお前の魔法は喰われたようだぞ」

「ザルド、どういう意味だ?」

「そのままの意味だ、お前の魔法がベルの付与魔法エンチャントに触れた瞬間に掻き消された。つまり、ベルの魔法の特性は……」

「魔力吸収マジック・ドレインか……、それであれば納得がいくか……。厄介な魔法を得ているようだな」

「ああ、これでお前と俺の魔法は封じられたと言えるな。だが、あの炎と雷の激しさは明らかに不釣り合いだ。恐らくはまだ何かを隠しているな、それも魔力吸収よりも厄介な何かを……!!」

「ならば、その正体を確かめればいい話だ。だが、このまま戦えばいずれ私達は……」
「ああ、そうだな。それに猪の糞餓鬼や勇者の糞餓鬼も来るだろうからな」

こうして、派閥騒動家族問題は苛烈さを増しながら激化していく。

独白

「なんだこれは・・・？」

轟音おとと衝撃が止んだと思えば炎雷の柱が天へと昇った。

そして、各派閥の冒険者達と共に柱の中心部に着くとそこにはあり得ない光景が広がっていた。

かつての最強の眷族と炎雷を纏う一人の少年が対峙している姿だった。

【ゼウス・ファミリア】”暴喰”のザルド

【ヘラ・ファミリア】”静寂”のアルフィア

かつての最強の中でも上位に君臨する実力者が閻派閥イヴァイルスに所属していることに驚きを隠せなかったが、それよりもその二人を相手に一人の少年が戦えている事の方が大きかった。

すると、死角から閻派閥イヴァイルスの集団が少年を害そうと矢を射かけようとしている動きを見せている。

「全冒険者に告ぐ、あの白髪の少年を援護しろ!! 閻派閥イヴァイルスに邪魔をさせるな!!」

咄嗟に叫んだ指示に対して冒険者達は閻派閥イヴァイルスから少年を守るように戦いを展開する。

本来であるならばかつての最強と対峙するのは因縁深いロキとフレイヤのハズなのに……、超えなければいけないはずなのにそれが出来なかった。

その時、フィン僕いやデイルムナ俺の胸中はとても穏やかとは言っていられなかった。そう、怒りに満ち満ちていた。

ザルドとアルフィア、第一級冒険者二人を相手に折れること無く戦いを挑み食らいついていく少年のあの姿を見て憧憬を抱いてしまった自分に対してだ!!

「くそっ、くそっ……!!」

そんな感情は捨てたはずだろう、あの時に……!!

何を今更縫ろうとしているんだ!!

「畜生……!!」

激しい戦闘の轟音おとによって掻き消されていることに安堵しながらも忸怩たる思いを胸に抱きながら目の前の敵を討つのだった。

「……………」

滑稽、まず最初に今の俺に対する浮かんだ言葉がそうだった。

雑兵を片付ける中でかつての最強を相手に刃を交えている兔とも思える少年を見る。

まるであの場所に俺の立つ場所は無いと言わんばかりに近くとも遠く感じてしまっている、

ギリツ!!

本来であればゼウスとの因縁を断ち切らねばならないのは俺だ、俺なんだ!!
しかし、運命はそれを許さずあの子供に一任させる。

なんたる脆弱!!なんたる懦弱!!

こんな所で俺は止まるわけにはいかない!!

俺が浴びるは敗北と屈辱の『泥』ばかりだ。

だからこそ俺は浴びてきた『泥』を全て『礎』に変える!!

『超克の礎』に変えてのける!!

一先ずの幕切れ

幾度目かの剣戟の最中、周囲から猛り声が聞こえてくる。

「やつと来たか、冒険者」

「遅い、遅すぎる。事態が佳境を迎えるにも拘わらず何をしていたというのだ・・・」

ザルドさんとアルフィアお義母さんが呆れた声でそう言った。

そう、他の場所で戦闘をしていた冒険者達が徐々にこの場に集まってきていた。

更に闇派閥イヴィルスと戦闘を開始していた。

「まあ、現状に胡座を掻いていた奴らはどうとでもなる」

「ああ、問題はあの子だ」

ザルドさんの言葉にアルフィアお義母さんが答える。

「まだまだあつ!!」

そう叫びながらも剣を握り振るう一撃をザルドさんの大剣が防ぐと同時に轟音と衝撃が走る。

そして、それと共に間髪入れずにアルフィアお義母さんの蹴りが放たれ、僕の脇腹に刺さる。

「ぐぶっ!!」

L.V. では僕が上でも対人戦闘の経験では二人の方が格上、徐々に押し込まれていく。

「どうした、俺達を止めると言っていた割には勢いが無くなったぞ」

「最初から出来もしないことを口にするな。もうお前の奏でる雑音おとを消すと・・・ゴフツ!!」

そう言うときアルフィアお義母さんが詠唱を始めようとしたとき、吐血した。

それも血の塊としてだ。

その光景を見た僕は思わず身体が固まってしまった。

「アルフィア、今はここまでだ。俺の身体も限界のようだ」

「ザルド・・・、退くでしょう」

「待って!!」

【福音ゴスペル】

その言葉を最後にアルフィアお義母さんが地面に魔法を打ち込み土煙と共に姿を眩ませたのだった。

「くそっ!!」

悪態をつきながら僕はこの場を他の冒険者に押し付けて身体を休めるために移動す

るのだった。

そうして、足を休めるために訪れたのはヘステイア様と出会った廃教会ではなく用水路の中だった。

そこで僕は腰を下ろし休息を取るのだった。

「アルフィアお義母さん、大丈夫かな・・・？」

休息を取りながら考えることはアルフィアお義母さんのことだった。

吐血するにしたってあの量は異常だ。

身体を壊していることは確定として原因は何だろう。

そこで僕はあることを頭に過らせた。

それは先天性の死病という言葉だった。

僕の実母がその死病で死んでしまったけど、あり得なくはない。

「アルフィアお義母さんもその死病に罹っている・・・？」

もしそうだとすれば、いままでどうやって生き延びられたんだ？

神々の恩恵の力なのか、それとも・・・。

「病の症状を緩和させる方法があるか・・・」

そう考えるのが妥当だと判断した僕は少しでも身体を休めるために眠りにつくのだった。

「ゴホツ．．．ゴホツ．．．カハツ．．．!!」

思わぬ限界を超えた戦闘時間により病の進行が進み発作が激しい。

何度も口から血の塊を吐いた、もう鉄の味しかせん。

私いや、私とザルドには時間が無い。

しかし、まさか愛^メしの実妹^{テリア}の忘れ形見^甥が未来からやってくるとはな．．．。

しかも「ゼウス・ファミア」団長の英傑^{マキシム}と同じ領域に立っている。

いや、経験での話であれば英傑^{マキシム}の方が上だが．．．。

あの子の口から怪^イしい白装束^{ヴァイ}共^ルの手によって怪^{クリーチャー}人二作り替えられたと聞いたときは冒険者と共に纏めて消し飛ばしてやると誓ったほどだ。

エレボスがそのような指示を出すとは思えんしな。

ああ、もどかしい!! 七年後の闇^{イヴァイルス}派閥の連中を殺して回りたい。

私の大切な実妹の忘れ形見を穢したからには相応の報いをくれてやろう。

そんなことを考えているとザルドがやってくる。

「アルフィア、身体はまだ動けるか？」

「今は難しいだろうが最終決戦までには回復させる」

「そうか」

そう言つてザルドは椅子に身体を預けるように座る。

「ザルド、お前から感じたベルあの子の状態味を教えろ」

「それは構わんが・・・急に如何した？」

「・・・・・・・・只の気紛れだ」

「そうか」

私の言葉にザルドはあの子のことを話し始めた。

「まずはそうだな、『家族』というものに餓えていることだな」

「そうか、やはりな・・・」

そう、その事に関しては私も感づいてはいた。

私達が死も厭わないと宣言した時、あの子は拒絶した。

ハッキリと私達のことを『家族』と呼んでいた。

「二つ目は英雄への憧憬」

「これに関しては大神ゼウスが絡んでいるだろうな」

「ああ、俺もそう思う。全くあの爺は何を考えているのやら」

「よせ、今更あの狒々爺の好々爺のことで悩んでいても仕方が無い」
「そうだな」

本当にあの糞爺はこんな時でさえも私達をかき回すのだな。

「三つ目が強さへの渴望」

「何？」

「これに関して俺は黒き終末に向けての物だと考えているんだが・・・、アルフィアお前の考えはどうだ？」

「そうだな、私は・・・」

そうして、ザルドと共にベルのことを話している内に夜が明けるのだった。

もう一つの眷属の物語

過去の世界に来て何日か経過した。

イヴィルス
闇派閥は断続的にオラリオを破壊していく。

僕はその間にも幾度か殲滅するも蛆のようにわいてくる。

そんな中で僕はダンジョンへと侵入を試みようとしていた。

目的は食事代わりの魔石を摂取することだ。

そのためにダンジョンへと向かおうとしたとき、一人の男神と護衛の笑みを張り付けた気味の悪い男が現れた。

「はじめまして、少年。俺の名はエレボス、こっちは俺の眷族でヴィトーだ」

「だからなんだ、僕に何の用だ」

男神の自己紹介に僕は冷たく接する、不敬かもしれないがヘステイア様以外の神は信用できない。

「反応が冷たいな、まあ警戒するのは正しい。それでも闇派閥イヴィルスの親玉だから・・・」

「死ね」

僕はエレボスの言葉を遮り首を刎ねようと抜剣し斬り掛かるも割って入ってきたザ

ルドさんに弾かれてしまう。

「退いて貰えませんか、ザルドさん。そいつを殺せない・・!!」

「すまんが、それは出来ん。エレボスにはまだ役目がある」

止め処なく沸き上がってくる殺意を僕はザルドさんの後ろにいるエレボスに向ける。

「おー怖い、いやマジで。これゼウスの浮気を知ったときのヘラ並にヤバいな・・、マジで」

「だな。しかし、このままというわけにも行くまい」

そう話しているエレボスとザルドさんの後ろからアルフィアお義母さんが現れる。

「ベル、少し話をしに来た」

「話って何ですか?」

「まあ、色々だがここではなくあの教会で話したい」

アルフィアお義母さんの言葉に僕は剣を下ろすしか出来なかつた。

教会に着くと僕達はいろんな事を話した。

それも各派閥の首領達の過去話なども聞かせてくれた。

かつての最強が健在だったときの話もたくさん聞かせて貰った。

僕もヘスティア様と過ごした事を話した、その度にアルフィアお義母さんは羨んでいる様な様子をしていただけ、それを指摘していたらザルドさんの様に福音正拳で地面に

沈んでいただろう。

そして、話しの話題はあの事になんて変わってくる。

「ねえ、お義母さんどうしても……」

「そうだ、これは私もザルドも覚悟の上だ」

アルフィアお義母さんは僕の言葉を遮りそう言い切った。

「なら、僕はお義母さんの遺志を繋ぐよ」

「そうか、ありがとうベル」

僕の言葉にアルフィアお義母さんはそう言うのだった。

その瞬間、大地が揺れた。いや、正確にはダンジョンが啼いた。

「!?なに、これ!?!」

「そうか、実行したようだなエレボス」

「アルフィア、俺達の役目はもうすぐだ」

僕が驚く中でザルドさんとアルフィアお義母さんは平然としていることからこれが

なんなのかを知っているようだ。

「お義母さん、これって一体……?」

「これは神殺しの怪物が誕生うまれたのだ」

「神殺しの怪物……」

それを聞いて僕はLv. 8に至るときに倒した漆黒のモンスター二体を思い浮かべる。

「最期にお前と話すことが出来て良かった。これでようやく・・・」

そう言いながらアルフィアお義母さんは言葉を止める。

「ザルド」

「解っている、アルフィア」

「「ベル、私（俺）の血肉を呑め」」

「え？」

ザルドさんとアルフィアお義母さんの言葉に僕は呆けてしまった。

「お前のスキルは俺と似ている。だからこそ、俺とアルフィアの血肉を喰らえば更に力を得ることが出来るだろう」

「しかし、これは同時に賭けでもある。さっきの話の中でも言ったが、ザルドの身体はベヒーモス巨獣の血肉を喰らったことで全身を猛毒に冒され尽くしている。だから、お前には・・・」

「食べるよ」

僕はアルフィアお義母さん達の言葉を遮り答える。

「僕は今まで家族はお爺ちゃんしか居ないと思ってた。だけど、違ってたんだ。僕にはまだ厳しくも優しく支えてくれる家族が居てくれたんだと言うことが知れて嬉しいんだ。」

だから、僕はそんな家族の思いを無碍にはしたくないんだ」

「・・・そうか」

「ベル、ありがとう」

こうして、僕はザルドさんとアルフィアお義母さんの身体の一部を喰らった。

「ぐがあああああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああっ?!?!」

ザルドさんの一部を口にした瞬間、^{ベヒーモス}巨獣の猛毒は当然の如く牙を剥く。

「ベル、^{ベヒーモス}巨獣の猛毒に勝てよ。負けるな、止まるな、進み続けろ」

「ベル、お前は全てが終わるまでここにいろ。・・・さよならだ」

猛毒に悶えながらも二人の言葉が耳に届く。

駄目だ、行かないで。行っちゃ駄目だ!!

最初から二人はこうするつもりだったんだ、僕のスキルであれば時間がかかるが解毒もとい適応が出来ることを二人は見抜いていた。

だからこそ、僕に力を得させると同時に身動きを封じその間に計画を進めるつもりだったんだ。

「ふっ・・・ぎけろおおおおおおおおおおおおおおおっ!!!」

僕は怒号と共にスキルに全神経を注ぎ込み稼働させる。

その結果、僕は巨獣ベヒーモスの猛毒に適應することが出来た。

「早く……お義母さん達を追いかけないと……」

そう言いながら進もうとした時、エレボスが姿を見せる。

「何の用だ、エレボス」

「うむ、俺がここに来たのは案内役を買って出たからだ」

「あん……ない……やく？」

「ああ」

エレボスは自身を案内役だと言ってくるのに対して疑問を投げかける。

「何故、神が案内役をする？」

「いやなに、お前はザルドすら解毒できなかった巨獣ベヒーモスの猛毒に適應して見せた。その可能性をもっと見たくなくなってしまった、たんなる好奇心さ」

「……だったら、僕をどこへ案内するつもりだ」

「ダンジョン、十八階層でアルフィアが冒険者と戦っている。しかし、想定外の出来事が起こった。本来一体しか召喚されない神殺しのモンスターが二体産まれてしまったことだ」

「!？」

エレボスの言葉に僕は耳を疑った。

そして、僕はエレボスの考えている事を口にする。

「一体は冒険者が討伐するとして、もう一体は僕に討伐しろというのか」

「正解」

考えを言い当てるとエレボスは不敵の笑みを浮かべる。

「殴つても良いか」

「おいおい、勘弁してくれよ。L v. 8のステイタスで殴られたら送還されてしまう」

「じゃあ、手加減を覚えるための頭陀袋サンドバックになつてくれ」

「はっはっは、イヤだね!!」

そんなこんなで茶番は終わりにして僕とエレボスはダンジョンへと向かうのだった。

しかし、摩天楼施設パベールは封鎖されているため闇派閥イザイルスの使う経路でダンジョンへと向かう。

「ザルドさんはどうしたんだ？」

「ザルドは地上で現最強と戦っているよ」

「そうか・・・」

ザルドさんも戦っていることを聞かされ、僕も神殺しのモンスターとの戦いに戦意を高めていく。

そうして、辿り着いたのは完全に原型のなくなった二十五階層だった。

辺りは炎が燃え盛り、水も瀑布と化していた。

「ここが二十五階層なのか、まるで地獄だな」

「ああ、そうだな」

そんなことを話していると半狂乱化したモンスター達が襲いかかってくるが、それは僕が剣で一掃する。

「エレボス、お前には役目があるとザルドさんから聞いているがそれはなんだ？」

「それをお前に教える必要はないが・・・、強いて言えることがあるとすれば、未来かな」

「そうか」

僕の問いにエレボスがそう言った。

「それじゃあ俺は眷属達の元に行くとしよう。頑張ってくれベル」

「お前に言われなくても解っている」

そう言いながら破壊音のする方角を見ると、そこには上半身が巨人、下半身が大蛇、背中には翼の特徴を持つモンスターがいた。

「来い、モンスター」

そう言つて僕の戦いが切つて落とされた。

ば他のモンスターが隙間を塗って襲ってくる。

しかし、この状況に対して僕はある意味好機ではないのかと考えた。

補給のままならない現状で生み出されるモンスターは僕にとつては補給物資そのものであると考えた。

そう思ったら行動あるのみと僕はブルークラブ数体を魔石に変え喰らう。

すると、少しばかりではあるが体力が回復したような感覚があった。

これならば長期戦になろうとも戦えるような気がしなくもないが・・・、魔法を使うことにした。

『幾ら喰らえどもこの器溢れ零れでる飢餓は満たされぬ』『美食でも悪食でも満たされぬ』

僕は詠唱う、誰かに見せるわけでもないモンスターとの演武を披露するかのようにな・・・。

平行詠唱、それは魔導士であればなんとしてでも身に付けておきたい技能である。

それは魔法使用の際に動きを止めてしまう魔導士はそれこそ格好の的になってしまうからだ。

しかし、平行詠唱は魔導士の危険性はある程度は軽減できる。

軽減できるだけであつて無くなることはなくむしろ高くなっている可能性すらある。

何故なら、詠唱と同時に移動、モンスターへの対処など守られていた頃よりも思考を一つ二ついや三つ増やさなくてはならないからだ。

だからこそ、平行詠唱は熟練の魔導士でも身に付けている者はそう多くはない。

しかし、多対一のこの状況で初めて平行詠唱に挑戦する。

しかも、神殺しという規格外の化け物の前だ。

普通であればイカれていると誹りを受けるだろうが、そんなことはどうでも良かった。

ザルドさんとアルフィアお義母さん家族を守れるのであればどんな術も利用すると決めたんだ。

だから、失敗したとしても何度でもやってやる!!

『既にこの身は穢され侵食され禊も浄化もく**r b**

救恤く／rb>><<rp>><</rp>><</rp>><<rt>><</rt>><</rp>><</rp>><</rp>>

くいすら皆無く罪過の烙印を刻み込む』『飢餓の象徴たる涎は大地を侵し大海を穢し大空を閉ざす』『食物を喰らい、怪物を喰らい、精霊を喰らい、他者を喰らい、恩恵を喰らい、呪詛を喰らい、病魔を喰らい、意思を喰らい、誇りを喰らい、魂魄を喰らい、我が身すらも喰らう底無し穴の幽鬼』『森羅万象全て喰らい貪り味わい飲み込み己が血肉と化す』『たとえこの身この魂が無間の地獄に墮ちようとも喰らい続ける』『この身はい

ずれ神々をも喰らおう』『蹂躪し数多を飲み干し平らげる 暴喰の霸道ここに極まれり』
そう、僕はこれからも全てを喰らう。

『暴悪に喰らい尽くす原罪の一角たる暴喰の化身が胎動する』

【グラトニー・サーベラス】

その瞬間、僕は身体と剣に燃え盛る^{ほのお}赫焱と激しく迸る^{いかづち}金雷を纏い、地を蹴り砕くほどの力で駆け出す。

神殺しまでの進路を塞ぐモンスターを一撃で屠り魔石は捕食していき力の向上を図る。

すると、神殺しの左腕が膨張したと思ったならそのまま振り下ろしてくる。

僕はすぐさま後ろに跳び回避しようとしたが振り下ろされたその一撃は周囲を吹き飛ばす衝撃と轟音^{おと}が発生きた。

「ぐあっ!!」

それと同時に砕けた地面の一部や巻き込まれたモンスターが衝撃によって飛んでくる。

「邪魔だあっ!!」

そう叫びながら僕は衝撃に耐え飛んでくるモンスターは斬り捨て、瓦礫は躲していく

ことで前へと進んでいく。

すると、神殺しが追撃と言わんばかりに目から炎を吐き出してくる。

「ぐうああああああつ?!」

その炎が右腕に被弾し、苦痛に僕は叫んでしまう。

その様子を見て神殺しは二タリと気持ち悪い笑みを浮かべているのが視界に入ると怒りがこみ上げてくる。

「クソツタレがあああああああああああああああああつ!!」

それは神殺しに対してではなく自分自身に対してである。

僕はザルドさんとアルフィアお義母人さんに黒竜討伐を宣言したというのにこの体たらくはなんだといんだ!!

「僕は……英雄」になりたい……。僕を信じてくれる人達のために、想いを果たすために……。だから、お前らの命を喰らい尽くす!!」

そう言い切った瞬間、ある変化が起こる。

背中に刻まれた炉ヘステイア様神の恩恵が、神血イコルが激しく反応している。

すると、ただ纏うだけだった炎雷は集束されまるで鎧のように纏まってみせ、剣には刃に集束され炎雷によって剣身が延長され大剣の様になる。

そして、共鳴するかのように聖鐘楼かねねの音色が響き渡ると全身が、剣が白く光輝する光

に照らされる。

「ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!」

その光景を目にした神殺しは吠えた、目の前に居る危険を滅ぼすために死兵モンスターに襲わせる。

神殺しの咆哮に従って襲いかかる無数のモンスターに対して僕は一撃を振るった。

その瞬烈の剛閃はによって迫り来る無数のモンスターは灰と化し魔石に姿を変えた。
「!!?!」

神殺しは目の前で起こった光景に明らかな動揺を見せる。

自分は神を殺すために産まれたはずなのに目の前にいる小さき存在に臆してしまっていると言う事実を受け止めきれていないのかそれとも、純粹に目の前の小さき存在に恐怖しているか……。

そのどちらかはどうでもいい、しかし神殺しの取った行動が逃亡だった。

「逃げられると思うなよ」

その一言と共に駆け出し逃げ出した神殺しを背後から蹴り飛ばすとそのまま
グレート・フォー
巨蒼の滝の滝壺に叩き付けた。

しかし、流石は神殺しというべきだろう。

滝壺に叩き付けられた程度では魔石に変わることはなかった。

い」

その言葉を最後に僕の意識は遠のいていくのだった。

意識を取り戻すと、僕は本拠ホームの机に突っ伏して寝ていたようだ。

つまり、僕はさつきまで夢を見ていた・・・？

いやでも、アルフィアお義母さんの魔法やザルドさんの大剣の一撃、神殺しの攻撃を受けてたときの痛みは本物だった。

それが夢だと言い切れるのか、あれは間違いなく現実のハズ・・・。

「ただいま、あつベル君今日は帰りが早かったんだね」

「お帰りなさい、ヘステイア様。はい、今日は早めに切り上げてきたんです」

バイトから帰ってきたヘステイア様の問いに答えると、あることに気付く。

それは外套コートのように羽織ドロップアイテムっている巨王の剛皮だった。

これを身に付けていると言うことはあれは現実だったという証拠だ。

「ヘステイア様、「ステイタス」の更新をお願いしても良いですか」

「いいぜ、とは言っても君のことだからいきなりバカ高い数字を叩き出すのは目に見えてるから少しは安心して見られるよ」

そう言った話をしながら僕は「ステイタス」を更新して貰う。
その結果……。

ベル・クラネル

L v. 8

力 I O ↓ S S S 2 0 7 9 6 耐久 I O ↓ S S S 2 1 8 0 4 器用 I O ↓ S S S 1 8

6 9 6 敏捷 I O ↓ S S S 1 8 6 9 6 魔力 I O ↓ S S S 1 0 0 3 9

幸運 E X 怪人 E X

【人怪融合】

モンストルム・ユニオン

ハイブリッド

異種混成

ネオレギュラー

超越界律

ステイタス・バグ

神理崩壊

アニメ・イローション

穢霊侵食

【超越(怪人)】

オーバーロード

アベイロン・リパース

無限再生

アベイロン・アウクセンス

無限成長

クリティカルオーバー

限界突破

【捕食者】

プレデター

フルリカバリ

完全回復

モンスター・イーター

怪物喰い

モンスターム・タレント

【才禍の怪物】

超早熟する

りかい

怪物が続く限り効果持続

怪物の丈により効果向上

【怪物恩寵】

モンスターム・アムフロシア

オーバーイート

強喰増幅

無限暴喰

尽喰貪王

アブソルート・コピー

完全擬態

【グラトニー・サーベラス】

エンチャント

付与魔法

炎属性・雷属性

マジックドレイン

魔力吸収

- ・損傷吸収
ダメージドレイ
エナジードレイ
- ・生命吸収
カースドレイ
- ・呪詛吸収

・詠唱式『幾ら喰らえどもこの器から溢れ零れでる飢餓は満たされぬ』『美食でも悪食でも満たされぬ』『既にこの身は穢され侵食され禊も浄化も救恤いすら皆無く罪過の烙印を刻み込む』『飢餓の象徴たる涎は大地を侵し、大海を穢し、大空を閉ざす』『食物を喰らい、怪物を喰らい、精霊を喰らい、他者を喰らい、恩恵を喰らい、呪詛を喰らい、病魔を喰らい、意思を喰らい、誇りを喰らい、魂魄を喰らい、我が身すらも喰らう底無し穴の幽鬼』『森羅万象全て喰らい貪り味わい飲み込み己が血肉と化す』『たとえこの身この魂が無間の地獄に堕ちようとも喰らい続ける』『この身はいずれ神々をも喰らおう』『蹂躪し数多を飲み干し平らげる 暴喰の霸道ここに極まれり』『暴悪に喰らい尽くす原罪の一角たる暴喰の化身が胎動する』

【アウレー・エウアンゲリオン】

- ・回復魔法

・詠唱式『奏でられるは堅琴の音色』『その音色は優しき魂の平穩へと導く静寂の園へと通ずる』『静寂の園で響き渡るは聖鐘楼の福音』『静寂なる悠久の時間はゆつくりと流

れる』

「つて、何でもう昇華ランクアップが可能になっているんだい!？」

「実は……」

流石に僕も昇華ランクアップが出来ることには驚いた。

そして、ヘステイア様の質問に正直に話した。

「まさか、ベル君がゼウスとヘラの眷族の隠し子だったなんてね……」

「それをアルフィアお義母さんから聞かされたときは穏当に驚きました。でも良かったです」

「お爺ちゃんしか居ないと思っていた僕の家族はまだ居るんだって知れたんですから」

「そっか」

僕の言葉にヘステイア様は優しい笑みを浮かべながらそう言ってくる。

「それでヘステイア様ランクアップ昇華をお願いします」

「ああ、うん解ったよ」

そう言つて僕はヘステイア様に「ステイタス」を更新もとい昇華ランクアップをして貰った。

ベル・クラネル

L v. 9

力 I O 耐久 I O 器用 I O 敏捷 I O 魔力 I O

幸運 E X 怪人 E X

【人怪融合】

モンスターム・ユニオン
ハイブリッド

・異種混成

ネオイレギュラー

・超越界律

ステイタス・バグ

・神理崩壊

アニメ・イロージョン

・穢霊侵食

【超越怪人】

オーバーロード

アベイロン・リバース

・無限再生

アベイロン・アウクセシス

・無限成長

クリティカルオーバー

【捕食者】

プレデター

フルリカバリ

・完全回復

モンスター・イーター

・怪物喰い

マン・イーター

【才禍の怪物】

モンスターム・タレント

・超早熟する

・怪物が^{りかい}続く限り効果持続
・怪物の^{りかい}丈により効果向上

【怪物恩寵】
モンスター・ム・アム・フ・ロシア

・強喰増幅
オーバーイート

・無限暴喰
ベルゼブ

・尽喰貪王
タイラント

・完全擬態
アソルト・コピー

・成長増強
ビルドアップ

【英雄願望】
アル・ゴ・ノ・ウ・ト

・能動的行動に対することチャージ実行権
アクティブアクション

【血統系譜】
ゲノス・デスモス

・大神系譜
ゼウス・デスモス

・女神系譜
ヘラ・デスモス

【巨獣死毒】
デイルイテリオ・ベヒーモス

・死毒精製
クリエイト・デイルイテリオ

・死毒纏身
ボデー・デイルイテリオ

【グラトニー・サーベラス】

・エンチャント
付与魔法

・炎属性・雷属性

・マジックドレイン

・魔力吸収

・ダメージドレイン

・損傷吸収

・エナジードレイン

・生命吸収

・カースドレイン

・呪詛吸収

・アロステイア・ドレイン

・病魔吸収

・ディリテイリオ・ドレイン

・死毒吸収

・詠唱式 『幾ら喰らえどもこの器から溢れ零れでる飢餓は満たされぬ』『美食でも悪食でも満たされぬ』『既にこの身は穢され侵食され禊も浄化も救恤いすら皆無く罪過の烙印を刻み込む』『飢餓の象徴たる涎は大地を侵し、大海を穢し、大空を閉ざす』『食物を喰らい、怪物を喰らい、精霊を喰らい、他者を喰らい、恩恵を喰らい、呪詛を喰らい、病魔を喰らい、意思を喰らい、誇りを喰らい、魂魄あくてを喰らい、我が身すらも喰らう底無し穴の幽鬼』『森羅万象全て喰らい貪り味わい飲み込み己が血肉と化す』『たとえこの身の魂が無間の地獄に堕ちようと喰らい喰らい続ける』『この身はいずれ神々をも喰らおう』『蹂躪し数多を飲み干し平らげる 暴喰の霸道ここに極まれり』『暴悪に喰らい尽くす原罪の一角たる暴喰の化身が胎動する』

【アウレー・エウアンゲリオン】

・回復魔法

・解毒魔法

・解病魔法

・詠唱式『奏でられるは堅琴の音色』『その音色は優しき魂の平穩へと導く静寂の園へと通ずる』『静寂の園で響き渡るは聖鐘楼の福音』『静寂しずかなる悠久の時間ひとときはゆつくりと流れる』

「なんだいこれは・・・」

僕の「ステイタス」を見てヘステイア様はドン引きしていた。

「そうですね、既に発現しているスキルや魔法に効果が追加されるとは思いませんでしたよ」

そう、言葉通り既存のスキルや魔法に効果が追加されていたのだ。

それに関しては心当たりがある、それはザルドさんとアルフィアお義母さんが関係していることは確かだ。

恐らく二人の血肉を食べた結果が効果が追加されたと考えた方が妥当だ。

しかし、こんな事なら魔法が発現したときから一緒に有ってくれたら二人のことを助けられたかも知れないのに・・・。

どうしてもそんなたればを考えてしまう。

それは命を賭して壁として立ち塞がった二人への侮辱だと解ってはいるけれども、そう思わざることを禁じ得ない。

「もつと強くないと・・・」

そう呟くと、ヘステイア様が僕の頬に触れてこう言ってくる。

「君の気持ちは解るんだけどね、焦りは禁物だよ。それに失いたくない気持ちはボクだつて一緒だよ」

「ヘステイア様・・・」

ヘステイア様の言葉に僕は心が少し軽くなったような気がした。

「さて、今日はもう休もう。君には少し休息が必要だ」

「・・・はい」

そうして、僕とヘステイア様は食事と入浴を済ませ眠りにつくのだった。

増幅する悪意

迷宮都市オラリオの地下深くに存在する悪意の巣窟クノツツス人造迷宮、そこでは怪クリーチャー人の製造実験場が再建されていた。

「ヴァレッタ様、新たに怪クリーチャー人を生み出すというのは本当に宜しいのでしょうか？」

「今更何言つてやがる、あんな化けもんに対抗出来んのは同じ化けもんしかいねえんだよ」

配下の言葉にヴァレッタは威圧を込めてそう言い黙らせる。

「さっさとあのガキを始末しねえといけねえんだ」

そう言いながら試験管に入っている実験人体達間に目を向ける。

その試験管の中に入っているのは白妖精エルフに黒妖精ダークエルフ、獣人バルウム、小人族、アマゾネス、ドワーフ、ヒューマンなど種族は違えども共通している物がはめ込まれている。

それは拳大の極彩色の魔石である、更に首には黒い首輪が装着されていた。

「バルカの奴に創らせた操り人形マリオンネット・コラーバベティアーリングの首輪と人形師の指輪、これであのガキも操り人形にしてやるぜ!!!」

興奮しながら高笑いをするヴァレッタ、その姿は醜悪そのものだった。

七年前のオラリオから帰ってきた僕はザルドさんやアルフィアお義母さん、神殺しの怪物との戦闘で摩耗した愛^{ベッセ・マールホルツェ} 剣を手入れして貰うために椿の工房にやつてきた。

「椿、居るか？」

そう言いながら工房の中に入ると其処には精魂尽き果てて倒れている椿の姿があった。

「んお・・・、おおベルではないか・・・」

「とりあえず胸を隠せ・・・」

椿が起き上がろうとすると胸のサラシが解け丸見^{ボロリ}え寸前だった。

「すまんすまん、ずっと工房^{こご}に籠もりつきりだったのぞな」

後ろを向いたまま僕が指摘すると椿はそう言いながらサラシを巻き直す。

「それで手前に・・・」ぐうううううううう・・・。

「とりあえず・・・お前は風呂に入つてこい。僕は飯を買つてくる」

「重ねて済まんな」

そうして、僕と椿は話の前に食事をすることにした。

「ふう、食った食った」

「ごちそうさま」

食事も終えてようやく本題に入る。

「それでこんな朝早くに如何したのだ？」

「ああ、こいつの手入れを頼みたくてな」

そう言つて僕は「ベーゼ・マーレボルジエ」を椿に手渡すと、鞘から抜かれると椿が絶叫する。

「なんだこれは!?!どんな戦いをすればこんなにも摩耗するのだ、これは異常だぞ!!」

ボロボロの剣身を見て目を見開かせながら叫ぶ椿にこう言つた。

「実はある魔導具マジックアイテムが原因で七年前のオラリオに行つてきた」

「は、何を言っているのだお主？」

僕の説明を聞いて椿は頭に疑問符を浮かべる。

「信じられないだろうが、事実だ。そして、暴喰と静寂と神殺しの怪物と戦つてきた」

「成る程な、暴喰と静寂か。それに神殺しの怪物が相手であれば納得・・・出来るわけな
かろう!!過去へ渡つた?そこから訳が分からんわ!!詳細を求めろぞ!!」

僕の説明に椿は納得できず早口でそう言つてくる。

「解ってる、最初から説明するからしつかり聞け」

そう言ってくる椿に対して僕は懇切丁寧に説明をした。

そうして、椿はなんとか要領得たようで納得もしてくれた。

「成る程、再度詳しく聞いても頭が追い付かん。過去に行ける魔導具マジックアイテムなんぞがあるとはな・・・」

椿が顎に手を当てて考え込む姿勢を取る。

「実際に体験した僕だって夢だったんじゃないかって思っているくらいだからな。摩耗した剣とこれが必要じゃ」

「ん？そういえばその皮は何なのだ、ゴライアスの硬皮のように見えるが」

「ああ、これは神殺しの怪物の怪物素材ドロップアイテムだ」

「なんと、確かに実際に摩耗した剣とその過去で獲たという怪物素材ドロップアイテムが手元にあるのであれば信じる他ないな」

「ああ。それでこの巨王わの剛皮かを・・・」

「今お主が注文している防具に使えば良いのだな」

「ああ、頼む」

「応とも、満足のいく防具に仕上げてみせる!!」

そうして、僕は整備に出していた黒双剣を受け取るとあることに気付く。

「そう言えばこの双剣の銘はなんだったか」

「そう言えば決めておらなんだな、傑作が出来たと心躍っておったからすっかり忘れておったわ」

そう言いながら爆笑する椿を半目で見る僕。

「銘は持ち主であるベルが名付けるが良からうて。その方がその双剣も喜ぶであろう」

「そうか・・・、それじゃあこの双剣の銘は・・・」

《ベーゼ・マーレブランケ》

そう名付けた僕は ベーゼ・マーレブランケ 双剣を背負う。

「《ベーゼ・マーレブランケ》か・・・、中々に良い名前を付けたな」

「そうか、名前を付けるのなんて初めてだからそう言っただけで貰えるなら安心した」

椿の言葉に僕はそう返した。

そうして、僕は椿の工房を後にするのだった。

工房を出た僕の行き先は決まっていた、それはダンジョン。

L v. 9 となった僕は感覚のズレを修正するべくダンジョンへと足を運ぶ。

二十七階層を進んでいると希少怪物の水馬などのモンスターが数十体の群れが襲つ

てきた。

それを一撃で両断し魔石へと変え回収する。

そうして回収し終えたと更に下の階層へ降りていく。

前触れ

階層を降りていき辿り着いたのは三十七階層、目的地はもちろん闘技場。コロシウム

無限に溢れるモンスター達は感覚のズレを修正するのにうってつけなのだ。

「始めるか」

そう言つて闘技場コロシウムに降り立つと先ほどまでモンスター同士で殺し合っていたのが一

変し、一斉に僕に襲いかかってくる。

双ベゼ・マーレブランケ剣を抜き放ち、しばしの闘争に身を墮とすのだった。

ルーガルの胸を断ち、スパルトイの頭蓋を砕き、ペルーダの首を飛ばし、バーバリアンの顎を蹴り砕き、リザードマン・エリートドロツプアイテムを脳天から両断する。

蹂躪、その言葉では収まらないほど惨劇と共に大量の魔石と怪物素材が転がっている。

「そういうえばあのスキル試してみようかな」

そう言うとき双剣に纏わせるのは巨獣ベヒーモスの猛毒、試すスキルというの「巨獣死毒」だ。デイリテリオ・ベヒーモス

ベヒーモスの猛毒を宿していたザルドさんの血肉を食べて得たスキル、それを試すなら誰も寄りつかない闘技場コロシウムしかない。

そうして猛毒を纏わせモンスターを斬り魔石に変える。

しかし、これは猛毒で死んだというよりかは僕の一撃で死んでいる。

「うーん、このスキルは扱いが難しいかもな。使うとしても、闇派閥か……」

モンスターに使った結果、デイルリテリオ・ベヒーモス「巨獣死毒」は対闇派閥イグイルスに使うことに決めた。

その後はいつも通り魔法で闘技場全体を焼き安全を確保した上で回収と休息を取るのだった。

休息を取った後は更に下の階層に降りてきた。

四十四階層にいるフレイムロックから得られる怪物素材ドロップアイテム火炎石の採取だ。

「これはどういうことだ」

開けた場所までやってきた僕が見たものはフレイムロックの大群だった。

数十体以上はいるフレイムロックに対し僕は違和感を感じる。

「ダンジョンに生み出されたからってあそこまで固まって行動するか?」

そう、モンスターは生み出されはするものの一カ所には留まることなく徘徊している。

なのに、フレイムロックは大群と呼べるまでに集まっている。

「まあ、あれだけいけば火炎石も沢山採れるだろ」

そう言いながらその場所に飛び降りると、フレイムロック達が一斉に襲いかかってくる。

それを双剣で両断し魔石と火炎石にし回収し終わると地上へと戻るのだった。

地上に戻る途中、「ガネーシャ・ファミリア」の団員達が檻を運んでいる、しかも中に入っているのはモンスター。

「あの、モンスターを何処に運んでいるんですか?」

僕は近くに居た「ガネーシャ・ファミリア」の団員に話しかける。

「ああ、ここから運び出しているモンスターは全て三日後に開かれる怪物祭モンスター・ファミリアでの催しモンスター・ファミリアに使うんだよ」

「怪物祭?」

「ああ、お前さん最近オラリオに来たんだな。なら教えてやるよ」

その後、その団員から聞いた話はオラリオでは年に一度モンスターを調教する祭ティム「怪物祭」が開催される。

そのためにダンジョンからモンスターを連れ出しているらしい。

「逃げ出したり暴れたりしないですか？」

「そういう事もあるが問題はないよ、万が一の時は倒すし」

「そうですか」

「そうして、僕は【ガネーシャ・ファミリア】の団員との話を終え地上へと戻るのだった。」

魔剣嫌いの鍛冶師（ヴェルフ・クロツゾ）

ダンジョンから地上に戻ってくると僕は魔石と火炎石を除く怪物素材ドロップアイテムを換金し椿の工房に向かった。

その途中で椿の工房から怒声が聞こえてくる。

「いい加減にしろよ、椿!!俺のことを周りに吹聴するんじゃないやねえ!!」

「何を言っている、ヴェル吉。お前は何か勘違いしているのではないか、人間の身である鍛冶神バケモノを超越こえするには、『至高』に至るには血を、骨を、肉を、魂を摩耗けずり全てを捧げるしかないのだ」

「だから、お前のそれは逃避甘えでしかない」

椿の言葉には並々ならぬ重みがある、それは鍛冶派ヘアイストス・ファミア閥団長にして『至高』を求め一人の鍛冶師としての言葉だった。

「制作つくったとして最後には使い手を見捨てて砕けちまう魔剣武器なんて武器じゃねえ、只の消耗品だ!!武器は使い手の半身だ、俺は認めねえぞ!!」

「だが、それで使い手は生き残る確率は高くなる」

「・・・だとしても、俺は魔剣を打たねえ!!」

そう言つてヴェル吉と呼ばれた赤髪の鍛冶師が椿の工房から出てくる。

「おっと、済まない」

「ああ、こつちこそ済まねえ」

僕が入ろうとした時にヴェル吉と呼ばれていた飛び出してきたぶつかりそうになつたがそれは未然に防げた。

「おお、ベルではないか!! どうした、まさかまた整備か?」

僕に気付いた椿がそう言いながら近付いてくる。

それに最初に反応したのはヴェル吉だった。

「ベル・・・、おい椿ベルって・・・」

「おお、此奴は今噂になつておるL.V. 8のベル・クラネルだ」

そう言いながら椿は僕の肩を組む。

「ベル・クラネルだ、よろしく」

「あ、ああ。俺はヴェルフ・クロツゾだ、ヴェルフって呼んでくれ。家名では呼ばれたくねえからな」

「了解した」

そうやって自己紹介を終えると、椿がこう言ってくる。

「そうだ、ベルお主からもこの頑固者に言つてくれんか」

「おい、他の派閥の奴まで巻き込むなよ!!」

さっきまで二人で話していたことを蒸し返してくる椿に怒声を上げるヴェルフ。

「まあ、さっきまでの会話は外まで聞こえていたから事情は把握している」

僕の言葉を聞いてヴェルフは恥ずかしそうにする。

「だが、双方の意見はどれも納得は出来る」

更に続けた言葉で二人の視線はまっすぐ僕に向いた。

「椿の全てを賭しでもしない限り神々バケモには届くことはないということも、ヴェルフのいう魔劍は武器じゃなく消耗品だということも武器は使い手の半身だと言うこともな」

「……………」

「だったら、答えは簡単だ。不壊こわれない魔劍を創れば良い」

「はあっ!？」

「ほう」

僕の言葉にヴェルフは驚愕し、得心したような表情を浮かべる椿。

「おいおい……、何言ってるんだよ。魔劍は限界が来れば砕けるもんだろ、そんなもん……」

「無ければ造れば良いだけだろ、お前は世の常識を壊したくないのか鍛冶師?」

「!？」

僕の言葉にヴェルフはハツとする、そしてこう言い切ってくる。

「上等だ、やってやるよ。俺が魔剣の常識をぶっ壊してやる!!」
そうして、火が付いたヴェルフは樁の工房を飛び出していく。

自分の工房に籠もるのだろう、新たな魔剣を生み出すために……。

「ベルよ、感謝するぞ。あの馬鹿者がようやく己が“血”を受け入れはじめよつた」
「それは良いが、樁一つ訂正がある」

「なんだそれは？」

「僕は今Lv・8じゃなくてLv・9だ」

「は……？」

ステイタスの訂正をすると樁は哑然とした表情で僕のことを見てくる。

「いや、早過ぎるだろう。ベル、お主何をした？」

「お前なら解るだろ、例の一件だ」

「!! なるほど、そういう事だったか……」

過去への渡航、それは神々ですら信じがたいものであるからこそだ。

しかし、僕はそれだけが起因しているとは考えにくかった。

もう一つの起因はザルドさんとアルフィアお義母さんの血肉と恩恵を喰らったこと
も関係しているんだろう。

「それで管理機関キドに報告したのか？」

「あつ、忘れてた」

樁の指摘に気付き、ギルドへ報告すると文字通り大騒ぎになった。

神会（デナトウス）

私、ミイシャ・フロットは午前の忙しさを乗り越え、お昼休みに入っていたのですが・・・しかし!!

親友であるエイナ・チュール受け持っている担当冒険者のベル・クラネル氏の一言で私の休憩^{幸せ}は消し飛んだのです。

今日エイナは休日だったため職場^{ギルド}にはいません。

「L v. 9 になったからその申請に来た」

「はい！承りました・・・」L v. 9 ～～～～～～～～～!!?」

それを聞いた私の絶叫は管理機関^{ギルド}全体に響き渡り、クラネル氏のL v. 9 到達はオラリオ全域に知られることとなった。

こうして、私の幸せはどこかに飛んでいってしまったのでした。

「エイナく助けて～!!」

「さて、帰ろう」

そうして、管理機関キルクトに報告し終えた僕は本拠ホームに帰るとヘスティア様が何処かへと出かける支度をしていた。

「神様、こんな遅くにお出掛けですか？」

「ああ、今日はガネーシャ・ファミリアの本拠ホームで神会デナトウスなんだ」

「そうでしたか、それなら僕は護衛に付きますね」

「いやいや、これは神々だけの集まりだから君は入れないぜ」

「それでもです、僕にとつての主神は神様だけですから」

「ベル君……!!」

神と眷族の仲睦まじい一幕の後、神様と僕は諸々の準備を済ませ神会デナトウスの会場である「ガネーシャ・ファミリア」の本拠ホームに向かうのだった。

夜空に月が浮かび、この迷宮都市・オラリオを静かに照らしてくれている。

『本日はよく集まってくれたな皆の者!!俺がガネーシャである!!さて、積もる話もあるのだが今年も例年通りに三日後には怪物祭モンスターフェアが行われる!!皆のファミリアにもどうか是非とも……』

今回の神会デナトウスの主催者であるガネーシャが挨拶をしている中、他の神々は思うように行動していた。

僕はいつもの服装に上着を着ただけの恰好で、持参した保存容器タッパに並べられていた日持ちのしそうな料理を入れていく。

「アンタ、あの頃と何にも変わらないわね」

「!?」

突然、背後から声をかけられた事に驚いて喉を詰まらせてしまうけど、水を飲んで流し込んだ。

「ぶはあつ、急に驚かささないでくれよへファイストス!!」

後ろを振り向くと、僕が展開にいる時からの神友である鍛冶神へファイストスが呆れた表情をしながら立っていた。

「まあ、元気そうで何よりだわ。ヘスティア、アンタもファミリアを持つ事になったんだからちゃんとした振る舞いをしなくちゃダメよ」

「それくらいは僕だって分かってるさ。でも、こればかりは仕方が無いじゃないか、僕の所は零細ファミリアなんだからさ」

「何言ってるのよ、現最強のLv. 9の眷族ファミリアがいる派閥の主神なんだからしつかりしないと駄目よ」

「うん、そうだね・・・」

へファイストスの的確な指摘にボクはえも言えぬ気持ちになってしまう。

「ねえ、二人だけで話さないで頂戴。一緒に会場を見て回りましょうって言ったじゃない」

そう言って言いながらヘファイストスの隣から現れたのはオラリオ最強の一角である【フレイヤ・ファミリア】主神のフレイヤだった。

「ゲツ、フレイヤ何でここに!?!」

「あら、ヘステイアお久しぶりね」

ボクの言葉をスルーしたフレイヤはそう言って来て、ヘファイストスがこう続けて来た。

「さつき会場の入り口で偶然出会ったのよ、それで一緒に会場を回る事にしたのよ」

ヘファイストスは軽いノリでそう言って来るが己の苦手としているフレイヤが目の前にいるだけではなくて、その美の神の美貌フレイヤに目を奪われた男神達の視線が集中しているため鬱陶しい事この上ないとばかりにボクは顔を顰める。

「それにしても、フレイヤが参加してくるなんて何時ぶりかしらね」

「さあ、そんな事一々覚えていないわ。強いて言うなら気分が乗らなかつたって所かしら」

ヘファイストスの問いに葡萄酒フレイヤを一口踏みながらそう言っているフレイヤ。

「それにしても、ヘステイアかなりめかし込んでるじゃない」

フレイヤがヘステイアの方を見てそう告げる。

そう、今回の神会デナトウスは普段着に上着を羽織っただけの姿で行こうとしていたのだが眷族ベによつて白地に黄・橙・朱・赤といった炎を思わせる色合いのレースが使用されたドレスを身に纏い、首には蒼い宝石の首飾りネックレスを身に付けている。

「うん、ベル君が用意してくれたんだ」

「そう、いい子なのね」

ヘステイアの言葉にフレイヤは笑みを浮かべる。

そこへもう一つの最強派閥の一角「ロキ・ファミリア」主神であるロキがやって来る。「おーファイたん、フレイヤ!!それからドチビーって何やねんその高そうなドレスは!?!」

「登場と同時に騒がしいなあ、君は」

ロキの参加によつて神会デナトウスの夜は更けてくる。

一方、その頃外で待機している僕はある男達と邂逅する。

僕

【フレイヤ・ファミリア】首領オツタル

【ロキ・ファミリア】団員ラウル・ノールド

「……………」

三者の間に会話はなく静かに主神の帰りを待つのだった。

すると、最初に神ロキが出てきて帰って行き、次に神フレイヤが帰って行くのだが僕の横を通る時品定めをするような目を向けられたが無視した。

その後へステイア様が眼帯を付けた赤髪の女神と共に出てくる。

「お待たせベル君」

「おかえりなさい神様」

へステイア様の言葉にそう返すのだった。

【ロキ・ファミア】 馬車内

「ドチビの眷族間近で見てみたけど……あれは捨てられたくない兎やな」
ことども

【フレイヤ・ファミア】 馬車内

「可愛い兎さんね」

そう最大派閥の主神が述べていることは知らない。

悪意の牙

デナトウス
 神会から三日後、怪物 モンスター・ファイア 祭当日である今日という日は僕もダンジョンには行かずに祭りに参加している。

というのも、神様からも僕は働きすぎているから身体を休めるように厳命されたためである。

「別に気にしなくていいのに」

そう僕は眩きながら街の中を歩いていく、武装した状態で。

何故かはわからない、それでも拭い去る事の出来ない不穏な気配が漂っている。

なんだろう、この違和感は……。

「おい、怪 クリーチャー 人共の調整はどうなってる？」

「ヴァレッタ様、稼働可能なのは五体のみです。他の個体はまだ運用に不安材料が取り除けてはいませんので無理に稼働させた場合潰れるだけです」

ヴァレッタの問いに研究者が答える。

「チツ、あの化け物に対抗するには少ねえな……。いや、待てよ……。そうだな」

「どうかされましたか、ヴァレッツタ様」

あることを思いついたヴァレッツタに対し研究者が問いかける。

「なに、どうせ潰れちまうなら役に立つ潰れ方をしてもらうじゃないか」

「つまり、どういうことでしょうか」

「あの五体以外の怪人クリーチャー共には爆弾になつてもらおう」

「は!？」

ヴァレッツタの発言に研究者は思わず声を上げる。

「これ以上時間は与えられねえ、他の怪人クリーチャー共の完成を待つていたらあの化け物は更に手が付けられなくなる。その前にふつ飛ばしちまえば良いんだよ」

「なるほどでございます、もったいない気もしますがその方がよろしいかと」

最初の発言に驚いていた研究者だったが、ヴァレッツタの意見に賛同している。

「それに爆弾にした方が民衆共も巻き添えになるから一石二鳥だ」

ヴァレッツタの狂気に満ちた笑いが地下に響きわたる。

悪意の牙がひっそりと忍び寄ってくる、喰らいつき飲み込む時を待つ。

僕は屋台で串焼きと飲み物を買って食べ終えると闘技場コロシアムで行われているモンスター

の調教テイムを見に行こうと歩き出した時、悲鳴が上がる。

「なんだこれ」

悲鳴を聞いて向かった先ではモンスターで広場が大混乱になっていた。

「まずはモンスターを．．．!?!」

モンスターの撃退をしようと剣を抜いた瞬間、黒い外套コートに身を包んだ襲撃者が戦斧を振るってくる。

戦斧を受け止めると衝撃が生まれ周囲の人間が巻き込まれていた。

これは不味いと思い、僕はダンジョンに向かって走り出す。

すると、戦斧だけではなく十数人の襲撃者が姿を見せる。

そして、一人の襲撃者が住民達の多くいる場所で立ち止まり懐からあるものが見えた。

それは何らかの装置に取り付けられた火炎石だった。

その時僕は椿に教えてもらった闇派閥イグイルスの所業の一つ「人間爆弾」を思い出した。

「ふざけるおっ!!」

認識した僕はその瞬間、その襲撃者の元に駆け出し妨害してくる襲撃者達を蹴散らしその場所にたどり着き胸ぐらを掴み全力で宙に投げた。

その瞬間、その襲撃者は爆ぜた。

しかし……、その一連の流れは最悪の形を成した。

「い、闇派閥だ——————————!!」

誰かはわからない声、それでも混乱パニックを呼び起こすには充分過ぎた。

「くそっ!!」

周囲は大混乱、モンスターだけでも騒ぎになっていたが人間爆弾が最後のダメ押しとなつてしまった。

しかし、僕はモンスターに意識を回すことが出来ない。

人間爆弾が一人なはずがない、だからこそ襲撃者達は放置は出来ない。

だから、僕はモンスターは他の冒険者に任せて黒外套コートの襲撃者達の対処をする。

「お前達の目的は何だ、なんでこんなことをする!!」

声を張り上げながら問いかけるも襲撃者達は無言を貫きながら戦闘を続行する。

更に隙を見て人間爆弾を発動させてくるからこの上なく厄介だ。

そして、僕と戦闘バトルがなりたつているということ。

つまり、それは怪人クリーチャーであるということを示唆している。

「くそつたれがあああつ!!」

僕はそう吠えながら攻勢に出る、すると一人の襲撃者がしがみついてくる。

その瞬間、服を掴んでいる両腕を切り落とし蹴り飛ばしたと同時に爆発する。

「チツ」

その矢先、襲撃者の太刀の一閃を躲し剣を振るう。

高速の剣戟を繰り広げる中で襲撃者の顔を隠していた外套コートが取れて素顔が晒された。

「やはりか・・・」

襲撃者の一人は獣人、狐人フェルの女性。

しかし、それは些事であり問題ではない。

僕の予想は当たってしまっていた。

そう、眼の前の彼女は怪人クリーチャーだった。

しかし、気になることもあった。

何故、彼女はあんなにも眼が虚ろになっているのか・・・。

何か精神汚染系の魔法か呪詛カースをかけられているのかと考えを巡らせていると僕は彼

女が身に付けている悪趣味な首輪を見つける。

もしかして、あれが彼女の意識を奪っているものなのか？

そう考えている暇はあまりない、他にも襲撃者がいる以上彼女ばかりにかまけてはい

られない。

「一か八かだ」

そう言いながら僕は駆け出した、それに合わせて彼女も向かってくる。

先手は彼女の左の小太刀での牽制、それを剣でわざと受け小太刀を弾き飛ばす。

その後右の太刀を両手で掴み切り捨てようと僕に振るわれるも懐に飛び込み刃の根元で受ける。

そして、距離を潰した僕は彼女の首にある首輪を掴み引き千切った。

すると、彼女は糸の切れた糸人形のように倒れ込む。

「まず一人」

そう言つて僕は次の襲撃者の方を見ると、そこには三人一塊になつた襲撃者が撃鉄を引いた。

「しまっ・・・!!」

回避は間に合わず吹き飛ばされてしまう。

更に三人一塊の人間爆弾は次々に起動されてしまい街を破壊していく。

「くそっ」

悪態をつきながらも立ち上がり、剣を構える。

襲撃者達が一齐に攻勢に出てくる。

しかし、僕は既に斬るべき場所を見極めた。

それは首に装着されている首輪だ、そこを斬れば一時的ではあるが気を失い拘束出来る。

そう考えた僕は駆け抜けた、それこそ襲撃者達が反応することが出来ない速度で。そして、その速度のまま首輪を破壊した。

すると、さっきの狐人の女性と同じで首輪が外れると倒れ込んだ。

「一先ず全員連れて行くしかないな」

そう言つて僕は本拠ホームに戻るのだつた。

神様は避難所となつていた管理機関キルに避難してくれていた。

無事で本当に良かった、本当に。

慟哭

あの後闇派閥イヴァイルスによる怪物モンスター・ファイア祭襲撃事件は無事に収束したが、今回の事件で闇派閥イヴァイルスの復活を遂げたことが都市中に知れ渡った。

更に、脱走したモンスターに対しても闇派閥イヴァイルスが「ガネーシャ・ファミア」の眼を掻い潜り檻から開放したと見られている。

管理機関ギルドはこの事態に対応するべく対策本部を設置することを発表するのだった。

そして、その日の夜……。

僕と神様は眼の前で眠っている十人の怪人クリーチャーの対応に困っている。

「この十人の子供達も君のように怪人クリーチャーに変えられているっていうのかい？」

「はい、見た目からは判りませんが僕には判るんです。この人達は怪人おなじなんだつ

て……」

「ベル君……」

そうやって話していると、最初に首輪を破壊した狐人ルネールの女性が目を覚ました。

「!!」

女性は一瞬で飛び退き僕と神様から距離を取る。

「貴様ら、よくもつ．．．私を化け物に変えてくれたな!!」

「落ち着いてくれ、僕達は闇派閥イヴイルスじゃない。それに貴方なら判るはずだ、僕がどういう存在かが．．．」

「?．．．、まさか!?!」

僕の言葉に彼女は気付いた、僕が自分と同じ変えられた怪人そんざいである事を．．．。

「貴方も私と同じ．．．?」

「そうです、僕も貴方達と同じ怪人化け物です」

僕の言葉に彼女は吠える。

「ならば、何故神と一緒にいる!! 私達の生命いのちを弄んだ存在と!!」

魂の慟哭、それはどれだけ彼女の負った心の傷トラウマの大きさを物語った。

「ヘステイア様は僕を救ってくれた。だからこそ、僕はここにいる」

「それはどういう意味だ」

「僕達を弄んだ存在は闇派閥イヴイルス、七年前オラリオ崩壊を目論んだ存在だったが当時の冒険

者が撃破し消え去ったと思われていたが奴らは地下に潜っていた。しかし、今になって再びオラリオ崩壊に動き出したと考えられる」

「その一步が．．．」

「恐らく体の良い戦力増強の為に僕達を怪人化け物に変えたんだろうと思っている」

「ふざけるな、ふざけるなよ!!」

僕の言葉に彼女は怒号を上げる、体中から怒気をみなぎらせながら。

「事情は理解した、それで私達をここへ連れてきた理由を聞かせてもらおうか」

怒りで頭の中が満ちているが冷静に話をしようとする彼女に隠し事などせずに本心を話す。

「僕と一緒にイヴァイルス闇派閥を討つための一助になってほしい」

そう言いながら手を差し出す、すると彼女は笑みを見せながらこう言った。

「フツ。それは願ったり叶ったりだ、私は奴等を塵殺まで止まるつもりはないんでな」

そう言いながら彼女は僕の手を握る。

そして、「ヘスティア・ファミリア」に新たな眷族が加わった。